

---

# ロリコン・コンプレックス！

佐藤みりん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロリコン・コンプレックス！

### 【Zコード】

Z6010Z

### 【作者名】

佐藤みりん

### 【あらすじ】

小学生みたいな身長体型がコンプレックスの女子高校生、佐々木ゆみ。そんな彼女には好きな人がいる。

けれども、その恋の道は険しかった。何せ片恋の相手は学校中で噂になるほどの人物なのだ。憧れの彼が有名なのも当然。だつて学校一のイケ面で、定期テストの上位常連、その癖スポーツ万能、そして……真正のロリコン、だからだ。

『わたしの好きな人は、ロリコンです』　これはそんな一行目から始まって、迫りくる障害なんて跳ね飛ばし、立ちふさがる常

識の壁を突き破る、恋に生き抜くとひた進む女の子の、ピュア・ラ  
ブストーリー。

## その1 ルーリング

わたしの好きな人は、ロリコンです。

ある日、わたしは言いました。

「先輩、わたしの胸はぺったんこです」

わたしは胸に手を当て、ずんと先輩の目の前に立ちふがりまし  
た。

わたしのいまいる場所は先輩の部屋です。椅子に座つて何やら本を読んでいた先輩は、目の前に屹立するわたしに一瞬だけ目線を上げ、そしてすぐに戻しました。

「そうだね。ぺったんこだね。ちなみに君は、ぺったんこの語源は知っているかな」

「無論です」

落ち着きをはらつて言葉を返す先輩は、わたしの逆セクハラ発言に対してもあわてていません。あっさりと肯定してみせたところか、さりげなく話題を変えようとしています。

わたしからのセクハラに慣れたのでしょうか。ちなみにぺったんこの語源は諸説ありますが、もちつきの際にぺったんぺったんと音が鳴ることからといふ話を聞いたことがあります。真偽は知りません。

先輩の冷たい態度にも、わたしは揺るがずめげずに続けました。

「背だつてちつちやいですし顔だつてくりくりの童顔です。制服を着ていても中学生、私服で男子の友達と繁華街を歩いていたときは小学生と間違えられて、一緒にいたその男友達が条例違反の容疑で補導されたこともあります」

「それはその人も災難だつたね……というか、自分で言つていて悲しくならないかな」

「そうですね。昔は確かに鏡を見るたびに落ち込みましたし着る服が限られて泣きたくなりました。中学一年生の折に勇気を出して梓ちゃんと初めてブラを買いに行つた時、一緒に行つた彼女がAだのBだの店員さんと相談しているのに、わたしといえどサインを計つた時にまるでちよつと背伸びをした小学四年生を見るかのような微妙な笑顔で『お客様……まだご必要ではないのです?』といわれて、それでもスポーツブラとか子供用のじゃないちゃんとしたブラが欲

しかつたので喰い下がつてその結果『申し訳ありません。当店にはAAやAAAの在庫はございません』と謝られたといつトライマはいまで忘れられませんが、それでもいまは悲しくなんてありません！生まれ変わったんですね！むしろ先輩のニーズにこたえられることがあります！喜ばしく思つてます！ほら先輩！むづちやくまな板で小学生ばかりの童顔！ムラムラしませんか？』

わたしは顔を喜色に染めてずいと顔を近づけます。その距離、五センチ。高鳴る心音は伝えられなくとも、わたしのあらぶる吐息が先輩に伝わる距離です。

先輩は非常に嫌そうな表情で顔をそむけました。

「しないよ。君は僕の好みではないからね」

淡々とした答え。わたしはそれに、むむむと眉を寄せました。  
こんなにかわいい女の子が迫つているというのに、なんて気のない反応でしょうか。それとも先輩の読んでいる本は、鼻先に迫つている女の子よりも心ひかれるものなのでしょうか。

二次元ですらない文字の集合体」ときに敗北するなど、わたしの女としてのプライドが許せません。ちらりと本の表紙に目をやります。

先輩の読んでいる本のタイトルは『幼女甲冑の薦め』といつものでした。

「…………」

……幼女甲冑って、なんでしょうか？　なんやらものすごくハイレベルな匂いがしますけど……。お客様の中にご存知の方、いらっしゃいますか？　いらっしゃいましたら、『起立お願いします。その後、条例違反で警察に自首してくださいませー、とか一瞬

そのカオスさにキャビンアテンダント「」をしかけましたが、踏みとどまります。くじけません。わたしの恋はこんなことで折れるわけにはいかないのです！

「うなれば、実力行使しかありません。

わたしは先ほど意図して近付いた先輩の顔を見ました。理知的で整った顔。ニキビのひとつもないすべすべの頬。凜々しくも涼やかなその表情。そしてメガネ！ クールな美男子がそこにいます。

よし、と決めました。

キスをしてしまおう。

本にできなくてわたしにできる」とは多々ありますが、その筆頭たるものが肉体的接触「ミユニークーションであることは疑いの余地もありません。まして、いまここは先輩の家で先輩の部屋の中です。そして先輩の部屋にいるのは、わたしと先輩だけです。よつするに、密室で男女がふたりきりなのです。

これはやつてしまつても問題ないでしょう。

いえ、むしろやつてしまえという天啓ではないのでしょうか。そう、AをきっかけにBに移行しこまで「」といふ神のお告げに違いありません！

先輩の隙をついて……いまだ！

「何やつてんのよ、ゆみ！」

と思つたその時、ぱんっと音を立てて扉が開きました。

「あれ、梓ちゃん  
やつと来たか梓」

わたしと先輩の声がぴったり重なりました。

バッドタイミングでわたしの名前を呼んで部屋に飛び込んできたのは、中学生からの友達であり先輩の妹である梓ちゃんです。

実はもともと今日は彼女の部屋にお呼ばれしていたのです。わたしが先輩の部屋にいるのは残念ながら両者の同意のもとではなく、梓ちゃんがお手洗いに行っている間に彼女の部屋を抜け出し、勝手に先輩の部屋に入りこんだからにすぎません。

梓ちゃんはわたしの正反対にあるといつてもよい見事なプロモーションをしている、大人びた美人さんです。冬休みを終えれば高校一年になる彼女ですが、それを知らない人が見れば実際年齢より二つ三つ上の女子大生に見えるでしょう。

梓ちゃんは背筋をピンと伸ばして声を張り上げました。

「早くその変態から離れなさいっ。襲われるわよ！」

「そんなっ、梓ちゃん！ わたしと先輩を引き離さないでください！」

「おいおい梓。仮にも友達を変態だなんてひどいんじゃがないかい？」

？

その言葉に、梓ちゃんの眉がぴくっと反応しました。

「……はあ？」

憎しみを舌にのせ、なに言ひてのこいつ、といわんばかりに顔をしかめます。梓ちゃんの動きに合わせて、腰まで伸びた黒髪がさらりと流れました。

「あのねえ……」

そうして梓ちゃんがゆっくり視線を合わせたのは、先輩の方でした。

「アホなの、兄貴？」

梓ちゃんの視線たるや、真冬のシンデラ平原のよつて冷やかでした。田元がちょっときつめだといふこともあって、蔑視といふ言葉を見事に体現する様がとっても似合ってます。

「いまのは兄貴に会つたのよ、この変態クソロリコンがつ。ほら、離れなさい、ゆみ。あんた幼児体型だから兄貴の趣味にヒットしかねないのよ。危ないわよ。こつちあいで」

「うひゃん！」

「顔近づけすぎ、と言いながら梓ちゃんがわたしの襟を掴んでひっぱりました。梓ちゃんは「月曜にはあのクソロリコン兄貴を包装用の新聞紙で梱包して焼却処分してやりたい」と暴言を吐くほどの先輩嫌いなのです。

「梓ちゃん、離してくださいー！」

「だからダメ。そいつが五歳以上十三歳未満にしか興味がない口りコンの変態クズ野郎でもダメ。あんまり無防備すぎるのよくないわ。そのうち襲われるわよ」

「先輩ならいいですっ。望むとこです！　わたしは先輩に襲われたいんです！　いえ！　むしろー　わたしが先輩を襲つてるんです！」

「落ちつけちびっ！」

じたばたと抵抗するわたしの頭に、びすつと梓ちゃんのチョップが振り下ろされました。

## その1 らぶらぶ（後書き）

この物語は、大体を書き終えてからの連載となつております。一話ごとに投稿する形になるので、分量は一話につき千文字から五千文字ほどに。平均で一日に一回のペースで投稿していく予定です。

一話目、くすりとでも笑いを誘えましたでしょうか。不安に思いつつも、主人公のゆみに付き合つていただける懐の広い方がいらっしゃることを切に祈りまして。

## その2 がやがや（前書き）

前話から時系列があのと飛びます。

## その2 がやがや

春うらら。

小学生の高学年になる辺りから身体的な成長が止まり、中学生よりちつちやいちつちやい言われ続けたわたしもいよいよ高校一年生になりました。相変わらずちつちやい言われているのは変わりませんが、二年生です。一年生の時ほどの新鮮さと始まりの予感はありませんが、それでもちよつと胸がドキドキします。

時計を見ると、八時になる少し前です。ぼつぼつ人も集まってきた。新しいクラスメイトは、全然知らない人もいれば何となく見覚えのある人もいます。運が悪いのでしょうか、親しい友人はいるところゼロ。さびしいことです。

わたしは何の気なしに校庭を眺めました。桜の花は大部分が散ってしまい、そろそろ葉桜に移ろつかとしています。  
そんな春ですが、残念ながら、わたしの恋の桜はまだ咲いていません。

先輩に恋して以来のアタックに次ぐアタック。猛アタックに猛アタック。わたし史上でここまで積極的になつたことはないというくらいの突進アタックを続けたといいますのに、先輩は毛の先ほども私に興味を示してくれませんでした。

理由ははつきりとわかっています。

先輩が口リコンだからです。ロリータ・コンプレックスだからです。合法などには見向きもせず、同年代などもつてのほか、五歳以上十三歳未満にしか反応しない、真なる口リコンだからです。

……そういえば、コンプレックスって劣等感という意味ですよね……。しかしコンプレックスと言われて思い浮かぶ単語は、システム、ブラコン、ロリコンなどなど犯罪臭しかしないものばかりです。なぜ昨今では変態の代名詞みたいな言葉として普及しているのでし

ようか。

「おはよ、ゆみ」

思い悩んでいますと、声をかけられました。梓ちゃんです。振り返ればそこには、あいかわらず高校生とも思えない大人びた美人さんがいました。

「おはよ、梓ちゃん」

わたしもぴょこんと頭を下げます。喜ばしいことに、今年も梓ちゃんと同じクラスなのです。

「今日はいい天気ね。児貴みたいな変態は、この日の光を浴びたら消え去ってしまうようなくらいの陽気」

「先輩はゾンビか吸血鬼ですか……？」

今日の天気にさりげなく自分の願望を混ぜる梓ちゃんに答えて、ふと思いつきました。そうです。わからないことがあつたら、梓ちゃんに聞けばよいのです。

「梓ちゃん。コンプレックスってどういう意味か知っていますか？」  
「コンプレックス？ またややこしいこと聞いてきたわね……直訳すると『複合』とか『複雑』よ」

ややこしいと言つても、もじて考えずにあつさつ答えてくれました。梓ちゃん、頭也非常に良いのです。梓ちゃんは決して認めませんが、博覧強記の先輩の影響でしょう。

「複雑……？ はじめて聞きましたけど」

「まあ、そつちはあんまりなじみないわよね。日本語的な用法で『劣等感』って使われているのは、微妙に誤用なのよ。まあ、厳密には誤用とも言いづらいけど……。ちなみにコンプレックスはフェティシズム（俗にいうF/H）とほぼ同義に使われる」ともあるから、ファザコンとかスイコンとかいう使われ方もするの」

わかりやすくするためにだいぶ省略したから詳しきは自分で調べて、と言つて話を切り上げました。

「うん、勉強になりました。あまり簡単に人に聞きだすクセをつけるものではないでしょ。知りたいことを自分で調べるとこう」とは、自己を独立させる第一歩でもあります。

そうして梓ちゃんをおしゃべりをしていましたと

「やつほつ、藤堂梓と佐々木ゆみ！ 今年も同じクラスか！ 嬉しいよ！」

「なんだなんだー。まだホームルームもやってないのに授業しているのかー」

声をかけてきたのは去年も同じクラスだった二人です。成績はもといその行動がおバカで有名なコンビです。最初に声をかけてきた元気のいいショートカットの方が黒衣莉由、間延びした口調のふわふわ髪のほうが白木岸祢。通称、白黒コンビで先生からも二人セットで目をつけられています。

「おはようござります、おふたりとも」

このふたりも一緒にクラスなんですね。残念です。

梓ちゃんもわたしと同意見なようで、ふたりを見るや田を剣呑に尖らせました。

「何よ、あんたら同じクラスじゃないでしょ。ていうか階が違うわよ。一階じゃなくて、一階でしょ」

ちなみにうちの学校は、一階が一年生、二階が一年生、三階が二年生といつ具合に教室が区切られています。

「ちょっと待て！ 留年なんてしてないぞ。あっちだけならともかく、あたしは違う！」

「おこー。うちばばかじやないぞー。あっちだけなら、まず間違いなくそうだけどなー」

邪険にあしらひ梓ちゃんに、おバカのふたりは互いを指差しました。

ふむ、つまりは

「なるほど。要するに二人とも留年なんですね。どうぞ仲良へ一階へゴーしてください」

「なにー！」

「むづー」

親指を下に向けてみせると、ぱちり、と二人の視線が力合います。

「お前が馬鹿なせいで！」  
「アホがいるからだー！」

そのまま見ていますと、どちらが眞のバカかの論争が始まっています。おバカのふたりはあいかわらず仲が良いようですが、梓ちゃんがため息をつきました。

「新学年になつたつて、いつのにやかましいわね、バカどもは、「でも梓ちゃんは物知りで教え方も幅広いので、よい教師になれると思いますよ。ほひ。古典の山川先生とかよりはずつと」

あの白黒コンビが進級できたのは、間違いなくテスト前に開いていた梓ちゃんの勉強会のおかげです。

「ゆみも戻らませなー」

「あつ」

「うつんといづかれました。意外とわっしょい攻撃に弱い梓ちゃんは照れていぬらじぐく、ちょっと頬を紅潮させていました。

「それより放課後の同好会、行く?」

「無論です」

わたしは力強く頷きました。

同好会というのは、わたしと梓ちゃんと先輩の三人で形成されているものです。といつことは、先輩と確実に出来えるチャンスです。先輩と同じ部屋にいられるのです。先輩と同じ空気が吸えるのです。

「地球が割れても行きますともー」

それで行かないわけがありません。わたしは先輩を愛しているのです。

「あつや」

鼻息を荒くするわたしの頭に、梓ちゃんはぽんと頭に手を置きました。

「ま、とりあえずホームルームと始業式が先ね」

やれやれとため息をついて、梓ちゃんが自分の席に向かいます。おバカの二人の論争の決着を待たず、キーンローンカーンローンとチャイムが鳴り、同時に先生が入ってきました。

「おーい、そこの白黒二人は新学期初日から何やつてるんだ。始業式前から早々に生徒指導室に行きたいのかお前らは」

去年の生徒指導を担当していた体育教師が、今年は担任のようです。そのお言葉に、ふたりはびっくりと身を震わせて大人しくなりました。

今日は平和な日になりそうです。

### その3 めりめり

わたしと梓ちゃんはとことこ廊下を歩いていました。

「終わりましたね」  
「終わったわねー」

梓ちゃんがぐぐっと背伸びをしました。

今日は始業式とホームルームだけなので、早く終わっています。クラスは梓ちゃんとおバカのふたりを筆頭に、女子の知り合いが結構いたのですぐになじめるでしょう。ちなみに始業式を妨害したおバカの二人は生活指導室行きです。

男子は見知ったのが何人か、それにひとりだけ去年仲良かつたのがいましたが……うん、あれは見なかつたことにしましょう。

「バカふたりはあいかわらずバカだつたわね」

「変わらないので、安心できますけどね。あのふたりを見てるとなごみますよ」

「そう? しつかし学校側もよくあの二人を同じクラスにしたわよね。始業式そようやらかしてんしさあ」

「問題児をまとめて見はりやすくしたんじゃないですか? 生徒指導の中村が担任になつたのつて、どう考へてもあのふたりのせいですしき」

「いや、それでも普通別々に分けるつて」

おバカのふたりをネタにほのぼのと会話を交わします。

いまはまだ昼前。時計をみると十一時を少しまわったところでした。

始業式はぴかぴかの一年生を見た以外、校長の話も退屈で特に印象もなく終りました。

「「」の後は同好会ね

「そうですね

### 地域福祉同好会。

それがわたしと梓ちゃんが所属しており、また去年先輩が入学早くに立ち上げた同好会の名前です。

その活動内容は、地元のボランティアに参加しまくるという同好会です。遊びたい盛りの高校生ではいつさいの魅力を感じられないこと間違いなしの、存在理由を疑つてしまつのような活動内容でしょう。

同好会の強いて得になる点を上げるならば、内申が良くなるぐらいでしょうか。奉仕活動が好きで好きでたまらないという変わった嗜好の持ち主でもない限りは、活動に惹かれて入りたいとは思うようなどこではありません。まあ、わたしからすれば、先輩がいるといふその一点で全ての悪条件は払拭されます。

ちなみに去年の冬までには同好会員は先輩と梓ちゃんの藤堂兄妹ふたりでした。一年の冬休み明けにわたしが加入し、現在では三名になっています。

規模的に見れば非常にちっぽけな団体です。あくまで同好会であり部活ですらないのになぜ部屋が与えられたかといえば、非常に学校に都合がよいからでしょう。去年の半年ほどを真面目に活動してから、部室が与えられたらしいです。

わたしたち地域福祉同好会は確かに学校の評判にプラスになる要素しかない同好会です。その上、わたし達は非常に真面目に活動しています。傍から見れば健全この上ない同好会でしょう。

ただ、先生方は気がついていないのでしき。

先輩が獲つてくる仕事は、主にというか全て児童福祉のボランテ

「アだとこ、ハーハー。」

「今日は同好会は会議の日でしたっけ」

同好会の活動は基本、ふたつに分かれています。ひとつはボランティア活動そのもの。そしてもうひとつは、数あるボランティア活動の中で何をするか選別して決めるための会議です。

「ハーハー」

梓ちゃんは田をざわざわと怒らせて領きました。

あいかわらずヤル気が満ち満ちています。もはや殺氣と間違えかねないほどの気を放出しているのは、梓ちゃんが同好会に入ったエンソードに起因するものです。

「相変わらずヤル気に満ちてるというか殺る気に満ちているというべきか……まあ、梓ちゃんの目的はそっちですからね」

去年入学したばかりの時分です。児童福祉ばかりやっているという同好会の内容を知った梓ちゃんが怒り狂い「あの兄貴が犯罪行為に走らないように見張ってくれるわ！」と叫び入部したという逸話があるのです。おバカのふたりに聞いたことですが、多分事実でしょう。

よつて会議の日、同好会の討論は非常に白熱します。

「絶対、変態兄貴には負けないわよぉ……！　あのロココンに児童福祉になんて、やらいしてたまるもんですか！」

梓ちゃんが、ぐぐつと拳を固めました。気の入れようが半端ではありません。今日も藤堂兄妹の論争が繰り広げられることがでしょう。

ふたりの論争は見ているだけで面白いものがありますから、構わないのですが。

過剰なまでに気合を入れる梓ちゃんの肩に、ぽんと手を置きました。

「まあ、でもお昼を食べましょ。まだ時間がありますし、学食でおしゃべりして時間を潰しましょ」

同好会活動は、一時からです。

「わうね。あのロッコンを呑きつぶすために、しっかり食べないとね」

梓ちゃんが、不敵ながらも怪しい笑顔を浮かべていました。

## その4 まいりせり

先輩は、ロリコンです。

わたしは先輩のことが大好きですが、先輩はそれと同じくらい幼女を愛しています。先輩がロリコンなのではなく、ロリコンという存在の全般が先輩なのではと思つてしまふほどその愛は無限大であり、彼方に広がる大宇宙と先輩のロリコンを、そのどちらが広大かと問われたら、わたしは答えることができないでしょう。

では先輩がどれほど幼女を好きか、ついでにわたしがどれくらい先輩のことが好きかを端的に表せるHピソードがあります。少し昔、といふか始業式の数日前のことです。

ある日、先輩はこいつ言いました。

「ペットボトルには一種類ある。ただのペットボトルと輝くペットボトルだ」

「輝くペットボトル？」

それは休日のことです。いつものように道行く幼女を眺めて愛でるために外出した先輩を、これまたいつものようにわたしがストーキングしていました。三百六十度どこを見渡してもおかしなことなど一点も見当たらない、いつも通りの休日の日常です。

「なんですか、輝くペットボトルって？」

ただ先輩の外出はなぜか追跡者を振り切らうとするかのようにあちこち場所を移動するために、同行する方としては少々疲れます。先輩が自動販売機で飲み物を買って足を休めたのを合図に、わたし達は休憩をしていました。

「そうだね。例えばこれはただのペットボトルだろ?」

わたしの疑問符に先輩は自分が飲んでいたペットボトルを軽く持ち上げました。すでに飲み終わつたようで、その中身は空になつています。

「はい、まあそうですね」

「飲み物が入つていないペットボトルには、普通何の価値もない。けれど十三歳未満の女の子が飲み終わつたものは輝くペットボトルとなる。僕の目には、その差の見分けがつくんだよ。十三歳以上の人間が飲んだペットボトルはただのペットボトルでしかないが、五歳以上十三歳未満の女の子が飲んだペットボトルはまばゆいばかりの光を放つてゐるんだ」

どうやら先輩に備わつてゐる幼女感知機能は、人間の域を越えつつあるようです。

さすがに啞然としていますと、先輩は飲み終わつたペットボトルを自動販売機の脇においてあるゴミ箱に入れました。

「このゴミ箱にはないね。あればそれを収集して水筒代わり使うんだが……残念だ」

「では先輩。これを進呈します。輝いてますか?」

「いやいやいや。ただのペットボトルなんて、『ゴミでしかない』

わたしが自分の飲み終わつたペットボトルを見せると、先輩は首を横にふりました。

なんとも素つ気ない反応です。思春期の男であるならば、女の子が口をつけたペットボトルを前にすれば「間接キス!?」と胸をどぎまきさせるのが一般的な反応ではないのでしょうか。

わたしは「むい」 と唸ります。

「先輩は五歳以上十三歳未満の女の子にしか興味がないそうですが、そもそもそれは何故ですか？ 十歳を過ぎれば、わたしより発育のよい女の子はちらほらでてきます。幼いからといって純真であるといつことが幻想なのを承知してないわけでもないでしょう。五歳以上十三歳未満にあって、わたしにないものとはなんですか？」

「君が六歳でも十歳もなく、いま十六歳であることだよ。そんなことよりもういい加減、付きまとつのはやめてくれ。さすがに僕も疲れるよ」

そう言つて先輩は再び歩き始めました。

先輩の言葉はとても納得のできるものではありません。そもそも理由になつていません。いつもならば先輩の言葉など無視してとことんつきまとうわたしですが、その時はその場で数秒思案しました。

「…………」

わたしの視線の先には、先輩がペットボトルを捨てたゴミ箱がありました。

キーンゴーンカーンゴーンと、この学校の誰よりも時間に忠実なチャイムが鳴ります。いつもなら昼休みの始まりを知らせる鐘にとたん学校中が騒がしくなりますが、入学式があつた今日は午前で終わりのため大半の生徒は帰宅していますから、静かなものです。

「いただきまーす」

「いただきまーす」

わたしと梓ちゃんは声を合わせて食事を始めました。学食で、わたしはランチを。梓ちゃんは、カツ丼を。

……女の子が、かつ丼つて、梓ちゃん。

「梓ちゃん、それゲン担ぎですか？」

箸で示してみると、梓ちゃんは何のためらいもなく領きました。

「そ、う、よ、」

「またよくわからなーことを……」

「負けられないのよ。変態」とかに、負けるわけにはいかないのよ

」

そうして他愛もない会話をしながらむしゃむしゃ食していますと

「せ、う、い、え、ば、ゆ、み。あ、ん、た、も、し、か、し、て、お、金、が、な、い、の、?」

ふと梓ちゃんが心配そうに聞いてきました。いきなりなんでしょう

うか。会話の脈絡なくやつ聞かれたので、わたしは首を傾げました。

「いえ？ 潤沢ではないですけど、困つていのほどでもありますん

ようあるここつも通りです。

「でもあんた最近そのペットボトルに飲み物入れてくんなつになつたじやない。飲み物を貰つお金もなくなつたんじやないの？」

梓ちゃんが机に置いたペットボトルを指差して言つます。

「ああ」

その指摘で命懸がいました。確かに数日前から、同好会活動中でもわたしはこの使用済みのペットボトルを使つていました。

「どうしたの？ なんかあつたなら、相談してよ」

梓ちゃんの目はちよつと不安そうで、わたしが窮状にいるんじやなかと心の底から気遣つてくれてこました。

どうやらこらぬ心配をかけてしまつたようです。これは早く誤解を解かねばと箸を止めてペットボトルを持ち上げました。

「これは輝くペットボトルです」  
「輝くペットボトル？」

怪訝な様子の梓ちゃんにわたしは力強く頷きました。

「はい。これは梓ちゃんのお兄さんである先輩が口を付けて飲んだ

ペットボ

「

「飛んでけ彼方に！」

「ああ、なにを！」

今まで言わざる梓ちゃんがわたしの手からペットボトルをもぎ取つてベキメシャと音を立てて握りつぶし窓の外に力一杯放り投げました。野球部もびっくりの遠投であり、握力です。

わたしはあわてて窓枠に手を付いて迫りますが……残念なことに、最近わたしに備わった先輩感知機能を持つてしまも、輝くペットボトルのきらめきがどこに飛ばされたのか分かりません。

わたしは涙目になつて振り返りました。

「梓ちゃん、窓から物を投げたらいけません！」

「何を常識ふつてんのよ！ アホなのあんたは！ 兄貴の使ってたペットボトルだ？ どこから手に入れたか知らないけど、おぞましいわよつ。わすがにドン引きよ！」

「え……だつてちゃんと洗いましたよ？ 本当は洗わずに使いたかったんですけど、「ミ箱から取り出したものですし衛生上良くないなどいふことで。それに何日も洗わずにいると飲み口から雑菌が繁殖しますからね」

「ミ箱から……？」

梓ちゃんの顔がひきつりました。その田は思考回路からして理解できない異星人の文化風習を見る目でした。

「ほえ？」

なにかまずことをしましたでしょつか。わたしは、ぱちくり瞬きをひとつ。

「だつて、先輩もやつているんですよ？」

「あのバカ兄貴殺す！」

「え、ちょ、梓ちゃん！？」

わたしが制止をする間もありません。

氣炎轟々、口から火を噴きかねない勢いで梓ちゃんは学食を飛び出ました。

## その6 ぱりぱり

学食を飛び出た梓ちゃんを追いかけましたが、体格差からも分かるように、わたしと梓ちゃんでは身体能力に差があります。おバカのふたりとすれ違つてすぐにその背中は見えなくなつてしましました。

それでも出来るショートカットの限りをつくし、肩で息をしながら同好会の部室に飛び込みましたが

「……」  
「……」

時すでに遅し。

容姿端麗な藤堂兄妹ふたりが互いに険悪な空気を出していました。そっぽを向きあつてているというのに、真正面から睨みあつてているかのようにバチバチと火花を散らし合ひといつ器用なことをしています。

ちなみに先輩の顔は平手ではたかれた後のような紅葉模様の赤い痕と拳骨で殴られたような青タンと猫にでもひつかかれたような五本線が引かれています。

あちやあ、と顔を掌で覆いました。

普段の先輩は温厚です。といふか、幼女に関すること以外ではまったく興味を示さず感情的にならずクールな人柄です。元から仲の悪いふたりではありますが、それは梓ちゃんが一方的に先輩を毛嫌いしているからです。見たところ、先輩は梓ちゃんに対し悪感情を抱いていません。常ならば梓ちゃんに嫌悪の感情をぶつけられても涼しい顔で受け流しています。

ですが、人には限度というものがあります。意味も分からずはた

かれ殴られひつかかられれば、そりゃ誰だつて不機嫌になるでしょう。

「はあ

わたしはため息をついて梓ちゃんの隣に腰掛けました。先輩の隣に座りたいのは山々ですが、『機嫌斜めの先輩と梓ちゃんの神経をさらに逆なでしても仕方ないでしょう。そこはわきまえます。

しかし、このままでは会議もできません。梓ちゃんの暴力を止められなかつた責任もありますし、とりあえず仲裁のため、先輩ラブのスイッチをいつたん切りました。

「……梓ちゃん」

「私は悪くないわよ

そう吐き捨てた後、そっぽを向いて田も合わせません。意思疎通の拒絶を全身で訴えていきます。

「……もひつ」

これは手のつけようがありません。

梓ちゃんも自分がまったく悪くないと思つてゐるわけではないでしょう。ただ先輩に対してだけは意地をつき通しています。兄を相手に謝るなんて、梓ちゃんからすれば沽券に関わることなのでしょう。

わたしはもうひとりのぼつを見ました。

「……先輩」

「僕が何をしたというんだい？」

さすがの先輩もぶすつとしています。

これまたもつともです。もつともすきて説得の余地がありません。ふむ、と考え込みます。どうしましょう。どうやつてこの場を治めましょうか。

いつそのこと何もしないで終了と/or考えなくはないのですが、来月分のボランティアの予定を決めるまでにあまり時間がありません。この時期ですと新入生勧誘についても話し合わなければいけませんし、進めないことにはこの先困ったことになります。

わたしは心中で唸りながらもふたりを見比べました。

大人っぽく美麗な見た目が良く似ていて、並べば一目で兄妹とわかります。それとこれを言つたら梓ちゃんが本気でぶち切れるので口には決して出しませんが、この兄妹、性格も根っこは似通つているのです。

「……梓ちゃん。話し合いをしまじょつよ。まひ、二人で」

無視されました。

「梓ちゃん。そう意地にならないでください」

無視されました。

「……梓ちゃん?」

無視されました。

「…………はあ」

いい加減面倒になりました。

ていうかそういう態度ならばわたしにだつて考えがあります。

わたしは席を立つて、先輩の隣まで移動しました。

「……ツ」

梓ちゃんの眉がぴくっと動きました。

無視しました。

「先輩。梓ちゃんなんてほつといて話し合いましょう」

「そうだね。今日は梓に話す意志もないみたいだし」

「はい。えへへー。先輩とふたりきりで話しあえるなんて嬉しいです。至上の喜びです」

「それはいいから早く話を進めよ！」

わたしと先輩は仲良く会話をします。先輩ラブのスイッチは切つたつもりでしたが、それでも思わずほしゃらんと顔がゆるんでしまいます。

「……ツ」

梓ちゃんの眉がぴくぴくと動きました。

無視しました。

「でも『ふたりきり』だったら話しえつまでもないですね」

ふたりきり、のとこに重点的にアクセントを置きます。

「……ツー」

梓ちゃんが猛烈な勢いで睨んできました。

無視しました。

「そうだね。一ヶ月分のボランティア枠は五個しかないからね」「はい。ではわたしと先輩で持ち合つた分で、来月分のボランティア活動はけつて」「ちょっと待ちなさい！」

とうとう立ち上がり叫びました。頭がいいのに刺激に対する反応が単純なところは、梓ちゃんのかわいいところです。

今度は無視しません。

わたしはにつこつ笑つて振り返りました。

「なんですか、梓ちゃん。文句があるならさつきり言つてください」「んなことは言われなくてもわかるわよー。ゆみのはいいけど、兄貴の持つてきたようないかがわしい活動は絶対認めないからねー！」

びしつと先輩を指差して、雄々しく言い放ちます。

「いかがわしいとはなんだ。真っ当な児童福祉じゃないか」「兄貴がいうと児童福祉がとたんいかがわしくなるのよ！」「それは言いがかりだろう。少なくとも活動中僕が何か文句を言われたことはないぞ。むしろ感謝されたことしかない」「だまんなさいよ変態口リコンー！」

「まあ、ふたりとも座つてくださいな」

また手が出たら、仲裁が面倒になります。わたしは間に入つて主に梓ちゃんをなだめました。

「ほら。気が済むまで話しあいましょう」  
「言われるまでもないわ！」  
「言つことは特にないかな」

そうしてつつがなく会議が始まりました。

「ちっせじょう、兄貴め」

「まあまあ。そんなことするとスカートめくれますよ」

同好会の会議終了後の下校途中です。わたしは地面を蹴りあげる梓ちゃんをいさめました。

今日の論争の決着はつきませんでした。ボランティア活動は月に五と決めてあります。同好会員がそれぞれ三つずつボランティア活動を見つけてくるのが決まりです。

わたしが取ってきた来月分のボランティア活動は三つともさして議論をするまでもなく認可されました。

そして、残り梓の一一つ。この一つが問題です。

梓ちゃんと先輩、藤堂兄妹が持ってきたボランティアですが、全て口にちが被っていたのです。というか、先輩が獲つてくる児童福祉のボランティアを決してやらせまいと、梓ちゃんがわざと口にちを被せているのです。毎度毎度見事に口にちを被せる梓ちゃんの執念たるや恐るべし、というほかありません。その心意気を見ていると、実は梓ちゃん、先輩のことが大好きなんじゃないかと勘違いしてしまいそうになるぐらい大したものなのです。

「今日も激論でしたね」

「クソ兄貴の奴、ヘリクツが異常に上手いのよね」

悪々しげに、もしくは悔しげに言こます。

「まあ、梓ちゃんの弁舌も大したものだと思いますけど」

藤堂兄妹の口の達者さでしたら、どうもどうぞいたいと思えます。梓ちゃんも先輩も、会議において退くということは一切しません。先輩の幼女と触れあいたいという欲求と、そんなことさせるかという梓ちゃんの思いがぶつかり合って、会議は激烈を極めるのです。

そして藤堂兄妹の壮絶な論議は終わりませんでした。

「でも新入生勧誘活動は決まったので良かったです」

勧誘活動は、ビラ張り以外は一切やらないことに決定しました。  
楽でいいことです。

梓ちゃんは肩をすくめて

「いろいろ部[室]があるつていつも、うちは同好会だもの。しかも三人。正式な部活動に比べてそもそもやれることも少ないし、別に人が欲しいわけでもないしね。はっきりいえば、新入生なんて入なんくてもいいのよ」

潰れても構わない、と暗に言っています。梓ちゃんが同好会に入ったそもそもその目的は先輩を見張るためですから、本心でしょう。そこらへん、あつたりしています。

実のところ、来年以降なら潰れても構わないというのは同好会員全員の共通意識でもあります。梓ちゃんは先述した通りですし、先輩も自分の欲望……もとい、幼女に対する無償のアガペーを満たすためにこの同好会を作ったので、自分が卒業した後は氣にも留めないでしょ。

「そうですね」

わたしも同好会の存続に興味がないところは同じです。愛着がまったくないとはいいませんが、先輩がいなくなつたら、本気で何の

魅力もありません。面倒だという気持ちの比重のほうが大きいのが本心です。

「わたしも先輩が卒業した後、同好会をやっているかどうか疑問ですしね。新入部員なんていないほうが、いつそ後腐れなくつぶせて楽かもしませんね」

ただ後輩が入つたら、さすがにそうそう止めるわけにもいきません。ボランティアが好きという奇麗な人間がないとも限りませんし、わたしも梓ちゃんも、そこで放り投げられるほど無責任ではないのです。

「……そういうゆみつて、そもそも兄貴のどこが好きなの？」  
「え？」

同好会の未来について話そうとしたのですが、梓ちゃんはわたしの意図しなかつたところに反応しました。

「話してませんでしたっけ？」  
「うん。聞いてないわ」  
「そういうえば、そうでしたっけ？」

そういうえばそれは梓ちゃんにも打ち明けていなかつたことでした。先輩を好きな理由。それはなんていうか、わたしからしてみれば考えるまでもないことだったからです。

でも梓ちゃんは「ロリコンは死滅しろ。消え失せろ。人類のゴミだ。火曜日には燃えろ」と口癖のように咳き先輩を毛嫌いしています。わたしのその愛が理解できないのも道理。そういう疑問が出てくるのも当然でしょう。

「だつて先輩はカッコいいですし頭もいいですよ。体育の授業を見た限り、運動神経だつて大したものでした。体育館でのバスケのミニゲームで、先輩は活躍していましたよ」

「あんた、去年の三学期から授業の時になぜかいなくなることがあるけど、まさか兄貴の授業をのぞきに……？」

授業など、先輩の汗を流す姿を見る価値に比べればやせこなものです。

「見た目良し、成績良し、運動神経良し。パーフェクトではありますか」「ロマンソンじやなければね」

それが全て、といふように梓ちゃんが憂い気に臉を落とします。そいつた小さな仕草も大人っぽくて様になっています。

「あんた、あの変態兄貴が身内にいる私の気持ちがわかる?」「代わつてください」

即座にわたしは切り返します。

先輩と一緒に家。なんという理想郷でしょうか。いえ、天国?はたまた桃源郷? それともそこはヴァルハラ? もう! ロマンチックが止まらないではありませんか!

「……ロマン」「おつと」

梓ちゃんの指摘に、わたしはあふれ出たよだれをじゅるりとぬぐいました。

「しかし一緒に家……つぶふくへ、やりたい放題ですね。梓ちゃん、さつそく戸籍変更の手続きを。養子縁組を活用すれば、住む家を何か変えられるはずです」

「……そつ。じゅあこいつ考えてみなさい」

ひどく疲れた様子の梓ちゃんが、言葉を変えます。

「あなたの父親は、重度のロリコンです。世間にじめかかることなく、ロリコングッズを買いあさっています。食事の時には、幼女の話しかしません」

「そんな人、父親じゃありません。いえ人間ですらありません。そうだ異星人に違います」

わたしはきつぱりと断ります。  
梓ちゃんがほっと息をつきました。

「よかつた。常識はまだ残っていたのね。それと同じなのよ  
「先輩はいいんですよ。先輩のロリコンは他のロリコンとはロリコンの一線を画するロリコンでありロリコンを超えたロリコンなロリコンなのでそのロリコンはロリコンであってもロリコンとして許されるロリコンなのです」

「もうこいつはダメなのかしら……」

「……あんた、昔はもつと普通の子だったわよね？　ていつか普通に普通の子だったわよね？　ねえ、いつの間にこんな子になっちゃったのよ。昔は誰かと付き合っていたも、そこまで盲目猛進じゃなか

た。

つたじやない。こいつ常識を、節度を、社会のやさしいルールを忘れたの？」

「それは先輩の素晴らしいがわたしを作り替えたと言つほかないですね。恋に恋していたわたしはもういません。先輩に出会つて初めて恋をし愛するということを知つたのです。常識？　先輩に対する無限大の愛は、そんな枠に収まりきりません。節度？　愛を叶えるのに、世間体なんて気にすることがどうして必要なんですか。社会のやさしいルール？　そんなものを守つていたら、わたしはいつまでたつても先輩に夜這いをかけることができないですか！」

「一生するな」

梓ちゃんは頭痛を堪えるようにこめかみに手を当てています。

「今日久しぶりにあんたをひたすら泊める予定だつたけど……急速に不安になつてきたわ」

「えええっ、約束は守つてくださいよ…」

「ああもうっ。守るけどさあっ。守るけどあんたも法律をきちんと守りなさいよ！？」

「え……も、もちろんですよ…」

「田を泳がすなあ…」

なぜだか知りませんが、梓ちゃんは涙田です。わたしの親友を泣かせるなんて、許せませんね。

「くつそつ、最近は偏頭痛がするよになつたわよこのバカゆみつ」「大変ですね。心身は互いに影響し合いますから気を付けてくださいね。あと好きなところと言えば、先輩のあまり人を差別しないところとか」

なぜ罵倒されているかいまいち理解できませんでしたが、わたし

は話を続けます。

「……あんたの目は節穴？ あれは何よりも最低な基準で女を差別しているクズ人種のひとつよ」

「またまた。妹である梓ちゃんが、先輩の素晴らしいさをわかつていなわけないでしょ。梓ちゃんのアンチ先輩は筋金入りですね。何ですか。実はブラコンだつたりしますか。シンデレの愛情の裏返し表現ですか」

わたしのからかいに烈火のごとく怒りだすかと思えば、梓ちゃんの反応は意外なものでした。

「……そうね」

こめかみを押されていた手をすっと下ろし、沈痛な面持ちでつむいでいた顔をあげました。

「昔は結構ブラコンだつたわ」

「はい！いつ！」

なんと首肯したのです。

意外、といづりいつそ衝撃的な告白です。わたしは思わず目を丸くしました。

「え、え！？ どういうことですか？ 梓ちゃん、実はライバルだつたのですか！？」

狼狽するわたしに対し、過去を幻視するためでしょうか、梓ちゃんがふつと遠い目になります。

「いい兄だつたのよ。昔はよく遊びに付き合つてくれて、勉強も教えてくれて、病気になれば母親よりも親身に看病してくれて、どんなわがまま言つても笑顔で答えてくれて、それでも私がいけないとをしたらきちゃんとたしなめてくれたわ。あんたのいう通り見た目だつていいし運動神経も人並み以上。それで頭もいいつていうんだから友達からだつて羨ましがられた。あれが私の兄なんだつて、誇らしくすらあつたわよ。胸に飛び込んで懐かずにはおられない、鼻高々と皿慢せずにほおられない、そんな理想の兄と言つてよかつたの。昔はそりや優しかったのよ。昔は……そう」

そこで梓ちゃんはわたしとぴたりと視線を合わせました。

「私が十三歳になるまではね」

全然意外な告白ではありませんでした。

「あ、なるほどーー」

それ以上の言葉はいりません。かわいさ余つて憎さ百倍。坊主憎けえりや袈裟まで憎し。そんなことわざが思い出されました。

「身内にまでそんなのだから、諦めたほうがいいわよ」

投げやりに梓ちゃんが忠告します。

その言葉には、これ以上にないほど納得できました。

梓ちゃんの先輩嫌いもただ単純な問題ではないようです。一言では語れない過去があり、その因果がいまにつながっているのでしょうか。

しかしそれで諦めるかといえば、そんなことはありません。わたしはしばらく無言でしたが、ふと語り始めました。

「わたしが先輩と初めて会ったのはですね、ふらりとひとりで道を歩いていた時です」

「……へえ」

わたしが真剣に告白しようとしているのを悟つたのでしょうか。梓ちゃんはこくりと頷きました。

「わたしはその時、とある事情でけよつと氣分が落ち込んでいました。傷心であってもなく道を歩いていました。その道すがら泣いている女の子を見かけたのです。ぶっちゃけわたしは子供が嫌いなのでただ通りすぎようとしたしました。でもその女の子に先輩がそつと近づき優しげな笑顔で頭を撫で慰めてあげたのです。そんな優しさの溢れる先輩の行為にわたしは……」

「勘違いしないでよ！ その笑みの擬音は『ぐへへへ』とかそんなとこりひこり……」

梓ちゃんがナイスツンデレでもつともな主張をします。

なるほど確かに彼女の言う通りではあるのでしょうか。あの優しい微笑みは仮面であり、それをひつぺはがしたならば表れるのは『ぐへへ』でしょう。

しかし

「まあ、それはそれで構わないです」

「構えアホ！ 何よ。何よ何よ！ まさかそれで惚れたの？ バツカじやないの！ 大バカよ！ 下手したらあの一人よりバカよ！？」

？」

「いえ、おバカの二人よりもうのはさすがに……それに大事なのはその後です。それですね、わたしは先輩を

「うるさいっ、もう聞きたくない！」

「

これからがよーといふだといつて、梓ちゃんはいつまでも耳をふさごでしました。

## その8 しんしん

昔のこと話をしましょ。

ある日、わたしの好きだった人は言いました。

「あんな小学生みたいなのと、付き合えるかよ」

放課後の教室に忘れ物を取りに行つた際、偶然にもそこでわたしの片恋の相手が友人數名と恋愛談議に花を咲かせているのが聞こえ、つい気になつて聞き耳を立ててしまつたのです。

そうしていたら、盗み聞きの天罰でしょうか。その言葉がわたしの片恋の口から出できました。

「…………」

教室の扉越しでそれを聞いていたわたしは、ふいとそこを離れました。

忘れ物を取ることもなく、わたしは家に帰りました。学校から家に着くのは無意識にできて、どうやつて帰つたのかさっぱり思い出せないほどです。そのまま部屋にこもろうとして、でもじつといふだけでは泣いてしまいそうでした。

わたしは私服に着替えて外に出ました。

行くあてもなく、ぶらりと道を歩きます。冬の空気は冷たく、吐く息は白くなり、時折吹く風は冷たく、優しくない冷気がしんしんと肌を刺すなか、歩きます。人通りもない路地道は静謐ですらあって、澄み切つた湖の底にいるかのようでした。

ただ、歩きます。途中、友達の梓ちゃんやおバカのふたりどころに行こうかとも思いましたが、きつと話していくうちに泣いてしま

うでしょう。愚痴をぶちまけても、涙は見せたくないません。それは、わたしのささやかなプライドと信念が、決して許さないことがあります。

だから、ひとりで考えます。  
さむいほどにひとりぼっちで。片恋相手の彼のことを。好きだつた彼の言葉を。

彼に悪気はなかったのでしょうか。もしかしたら、からかわれての照れ隠しだつただけかもしません。わたし達は結構仲良しでしたから、それをネタにからかわれることは大いにありそうです。

でも、ショックでした。

もともと惚れっぽい性格のわたしです。告白してフラれたことも付き合っている相手と別れたこともあります。その度にわたしは経験を積んで、タフになつたつもりです。

ただそれでもあの言葉はわたしの恋心をざつくり傷つけるぐらいの威力はありました。心をさまして、彼をいつぺんに嫌いにさせるほど聞きたくない言葉でした。

そうしてただ歩いていた時でした。

ふと、泣き声が聞こえました。振り返ると、ランドセルを背負つた小学校の低学年とおぼしき少女がそこにいます。

いつの間にそこいたのかは知りません。ほとんど周りを見ずについたので、気がつかなくて当たり前です。何故泣いているのか見当もつきません。ただ転んだだけかもしれません。迷子なのかも知れません。もしかしたら深刻な事情があるのかもしれません。

ただ。

わたしは微かにいらつとしました。自分の姿勢にコンプレックスのあるわたしはその合わせ鏡のような存在である子供が嫌いで、また今の気分はどん底にあるのです。そこにかん高い子供の泣き声がつきささつたら、どうなるかなんて言つまでもないでしょう。

泣けば解決するなんていう自立精神のない思考は、大嫌いです。

わたしはそのまま角を曲がってわんわんと喚く子供を見過ごそうと

しました。

けれど、女の子に近づく人を見つけてわたしは思わず足を止めました。

その人に見覚えがあつたのです。

それはロリコンと名高い学校の先輩でした。確か梓ちゃんの兄でもあつた人です。梓ちゃんは「兄貴？ 私の家にそんなロリコンは存在しないわ」と断言し、彼を徹底的に毛嫌いしていてわたしに会わせようとはしなかつたので直接の面識はありませんでしたが、一度三度遠目で見たことはあつたので顔くらいは知っていました。

何となく陰からのぞき見をしてしまいます。笑顔で女の子の頭を撫でていたその人は、しばらくして女の子が泣きやむと笑顔で手を振り見送りました。ロリコンという噂を知らなければ、親切なお兄さんが女の子を慰めているほほえましい場面に見えたでしょう。ただ、彼の本性を知っているわたしには『ぐへへへ』という下心が透いて見えました。

ぐだらない。

心の底からそう思いました。

踵を返そうとして、しかし一部始終を見ていたわたしはふと閃きました。

それは悪意のある思いつきでした。少し自虐的な行動でもありました。普段なら思いつくことすらなかつたでしょうし、行動に移すようなことは万が一にもしなかつたでしょう。

でも、いまは。

「……」

わたしは曲がり角から出て、ロリコンだといつその人に近づいていきます。歩いている途中に不安げな表情を作り、目前にいるその人に対して少し舌つたらずになるように意識して話しかけました。

「あの、お兄さん。道に迷ひかけたの

上田づかいでその人を見上げ、瞳を涙で潤ませることすらやつて  
のけました。

からかつてやれ、と思つたのです。ロリコンの男に小学生のフリ  
をして近付いて勘違いさせようと思つたのです。本当に自己満足で、  
理屈すらついていません。それでも、そんな手段を使ってでも、し  
ょせん男なんてそんなものなんだと溜飲を下げたかったのです。  
けれども、わたしの疑惑はあっさり外されました。

「道に迷つた？ 君は高校生だろ？」

その人の指摘に、えつ、と面食らいました。

「よそから来たのかい。まあそれにしてもその年で迷子とは……と  
りあえず案内するか。駅はこっちだよ」

そういうてその人は歩き始めました。果然としていたわたしはあ  
わててその人を追いかけます。

「な、なんでわたしが高校生だつて分かつたんですか？」

「君はどう見ても十六歳じゃないか」

ぴたりと年齢を言い止られました。

「……」

「」の人の口はどうなつているのでしょうか。騙そつとした罪悪感と  
氣まずさから、何も言えなくなつてしましました。

わたしはつづむきながら横を歩きます。その人の方から話しかけ

てぐる」ともあつません。

しばらぐ、無言でそうしていました。

「どう見てもと言いますけど」

言葉を漏らしたのは、そんなおもつくるしい沈黙に耐えきれなかつたから、というわけではありません。

ただ、もつと別のもの耐えきれなかつたからなのでしょう。

「わたし、よく中学生に間違えられます」

むしろ高校生に見られたことがありません。ぽつりとこぼした咳きに、その人は非常にどうでもよせそつに頷きました。

「へえ」

「小学生みたいだつて言われるのもしばしばです」

「そうか。僕には妹と同じ歳にしか見えないけどね。世の中には目が節穴の人も多いから、君を十三歳未満に含めてしまう人間も多いのだろう。まったく、愚かなことだ」

「はい？」

突然の演説に、目を丸くしてしまいました。

どうしたことでしょう。この人、小学生といつ単語を出したとたんペラペラと口数が増しましたのです。

「大体ね、世の中の多くの人間は間違つてゐるよ。人間を判断する基準は見た目じゃない。美人だからなんだというんだい？歳をとれば、みな変わらない。だからと言つて中身で判断するのもまた違う。性格なんて、いくらでも歪んでしまうものじやないか。清く正しい人間なんて、ただの世間知らずだ。ならば人間の絶対変わらな

いものとはなんだい。絶対的な基準となるものはなんだ。人と人の関係の中にはあって、それに流されないものとはなんだい？ そう。生きてきた年数、つまりは年齢だ。人間は、女を判断するのは年齢なんだよ

意味不明な論法を使い、堂々と最低なことを言いきっています。

「……は」

口リ「ン」と言つのは噂にたがわないよつです。さりげなく相談してみようか、愚痴をぶつけてやろうかと思つていたのですが、そんな気も失せました。  
ただその代わり

「は、あはっ」

お腹の底から、笑いが湧きあがつてきました。

「あははっ、あはははは！」

道端で立ち止まり、お腹を抱えて笑つてしましました。先導していた彼もいぶかしげな顔で振り向きます。

「どうしたんだい？」  
「いえもひおかしくつて！」

笑い過ぎてちょつと涙が出てきました。田元をこすつてそれを拭きとります。

ああ。

ほんとうに、変な人です。

人の価値とは何か。そんなことを語らうるとは思いもしませんでした。

人の関係の中で絶対に変わらないもの。そんなもの、おそらくは血縁関係ぐらいなものでしょう。時がたつごとに知り合いも友達も、そして当然恋人だって常に絶え間ない変化に襲われてしまいます。そしてわたしは、そんな悲しくも楽しい変化にこそ価値があると思っています。

ただ、それでも、見た目なんていうわかりやすいものにとらわれず、内面などという流動的なものにも目をくれず、それでも人と人との間に変わらないものを見つけようとする私のロマンチックな思考が、なんだかもうどうしようもないくらい

「ほんとうに、面白くって」

笑ってしまいました。

「そうかい」

「ええ」

外面を重視して、内面で判断するような、根っからのリアリストのわたしには、ちょっと眩しい思考です。

わたしは最後にくすりと笑って、カミングアウトをすることになりました。

「梓ちゃんはわたしなんかよりもっと大人っぽいですよ。スタイルもいいですし、お化粧も上手です。服選びのセンスも素敵ですね」

何より自分を磨くことに手を抜かない彼女を、わたしは尊敬しています。

「……ん? 妹を知つていいのかい?」

「梓ちゃんとは中学からの友達ですかから」

「じゃあ同じ高校?」

「はい。あなたの後輩になります」

「へえ」

やつぱり興味なさげに頷く那人、いえ、先輩にわたしは立ち止まりました。

「ありがとうございました」

頭を下ります。お礼と、何より謝罪の意を込めて、深々と。

「いじまでくればもう道は分かれます」

「じゃあ気をつけ」

「はい、先輩」

手を振ると、先輩はあっさり立ち去つて行きました。高校生にもなった地元の人間が、ここらで道に迷つといつありえない矛盾に気がついていないわけでもないでしょ? そこをつぶくることもありませんでした。

本気でわたしのことと一緒に欠片も興味がないのでしょうか。先ほどの女の子に見せたような笑顔は欠片もありません。

それでも。

わたしはそつと自分の胸に手を当てました。

ああ、こりないな。

とくんとくん脈打つその鼓動に、我ながら苦笑しました。

## その9 わくわく

『恋とはサメのようだ。常に前進しないと死んでしまつ』

映画「アーネー・ホール」での台詞です。お泊まりした昨日、梓ちゃんと一緒にDVDで見たその映画の台詞に、わたしは心を打たれました。

なんとこうな言でしょつか。これは歴史に残るに違いありません。そんなことを思うほどに共感したのです。

わたしの好きな人はロリコンです。

その性癖は重度なもので、わたしのことなど見向きもしてくれません。

他人は止めておきなよとわたしを制します。

親友に至っては、殴りかかってきかねない勢いでわたしを止めようとなります。

それでも止まらないのは、わたしがこの恋を死なせたくはないからです。

人の気持ちは定まらず、ふと足を止めれば田移りしてしまつものです。恋なんてたつたの一言で冷めてしまうことがあります。事実、一度止まって死んでしまった恋をわたしは知っています。

ただ、たつたの一言で胸があつたかくなれる恋があることもまた知っています。

だからDVDを見たその日に梓ちゃんの家で一泊し、学校に向かう最中わたしは宣言しました。

「といふことで梓ちゃん、わたしの恋はサメのよう!ノンストップで前進を続けます!」

「……サメ?」

「はー! ……って、うわあつ

横を一緒に歩いている梓ちゃんを見てわたしは思いました。

「……別にサメに喰えなくてもいいと思つたよな。回遊魚なり、イワシとかマグロとかでもいいじゃない。サメだとなんか、止めの命がけになりそうで不吉だわ……。マグロでも大変なのに、サメだと止めようがないじゃない。あにつら集団になるとクジラとか襲うのよ……」

どうしたことでしょう。梓ちゃんはひどく元気がないようです。顔色も悪く、足を引きずるようにして歩を進める彼女は全体的に負のオーラを背負っています。いつもさきりつとしている田口にいたつては彼岸をさまよつていなかのように虚ろです。

「あ、梓ちゃん？」

「うふふふ……ねえ神様……私、間違ってるかしら……？ 人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてつていうけどさ……私のしてることは、そんなバチ当たりなことなかしら……？ 友達が変態に、犯罪者にならないため必死に止めようつていうのは、そんなに悪いことなかしら……？」

どうやら昨日のお泊まり会での夜更かしがちょっと堪えているようです。梓ちゃんの目には一体ナニが映っているのやら。もはやわたくしの呼び掛けも聞こえていない様子でぶつぶつと呟き続けます。

これはいさかアブナイ状態です。どう見ても病んでいます。

実は昨日のお泊まり、梓ちゃんは徹夜をしたのです。明日の授業に備えて早く寝たほうがいいとわたしは忠告したのですが、梓ちゃんは何故か頑ななまでに寝ませんでした。しかたなくわたしは途中で説得とその他の目的をあきらめて睡眠をとったので楽ですが、どうやら完全徹夜を果たしたらしい梓ちゃんには朝日が随分と眩しい

「」とでしょ。今日の授業は居眠り必至です。

まったく梓ちゃんたら、わたしの助言を無視するからいつなるのです。これはちよつとお説教が必要でしょう。

「梓ちゃんたら完徹なんて美容と健康に悪いことをするからやつ

「友達なによ……兄貴が入つてる最中の風呂場に突入しょ。した  
り、隙あらば夜中に布団を抜け出して兄貴の部屋の錠前にペッキン  
グを挑んで忍び込もうとしたり、朝は『おはようのチュー』で目覚ま  
しを!』とかトチ狂つたとしか思えないことをじつて兄貴に突進し  
ようとする奴だけど、わたしの親友なによ……中学からの大親友な  
のよ……だから体を張つて止めたわ……はがいじめにして、ベッド  
に叩きこんで、徹夜で見張つて、なんとか心変わりするように諭し  
て……でも……あははは……もつ疲れちゃつたかも……偏頭痛と胃  
痛に加えて徹夜で暴走サメっこ押さえつけだもの……ふふ……つ  
かれ、たわ……」

「…………」

さすがのわたしも、悪いことしたなと思わなくもありません。

冷や汗がたらつと流れました。先輩への愛と梓ちゃんへの友情は、  
一応別物なのです。

これはいけません。ちらりと腕時計を確かめてみると、七時四  
十四分。始業まで時間の余裕はありますが、肉体的にも精神的にも  
疲労困憊している梓ちゃんが道半ばで倒れないかどうか心配です。

そうしていると、後ろから背中を叩かれました。

「おはよ、佐々木ゆみ! 今日もいい朝だな! それにしても、な  
んだこれは? 腐ってるのか? もしかして巨神兵か? どうした  
んだ? 早すぎたのか?」

「お前はバカだなー。梓に決まっているだろー。そんなこともわか

「うんとはお前にや腐つてるだろー。田と頭がー。でも、ゆみー。どうしたこのゾンビはー」

白黒ゾンビのおバカなふたりでした。  
なんてことでしょう。梓ちゃんが心配な今この時に、こんな二人では何の役にも立ちません。

「おふたりともおはようございます。梓ちゃん、ちょっと完徹をしちゃつたのでこんな様になつてなつてます」  
「目が腐つてるだとうー。しかもバカのくせに人のことバカとかいうなよ！ あ、悪いゆみ、後で事情はゆつくり聞くー。」「なにおー。バカにバカと言われるなんて心外すぎるだー。抗議してやるー。あ、ごめんなー、ゆみー。後で聞くよー」

聞かれたので説明したのですが、おバカのふたりはギャースカ言い合いを始めていました。ちなみに腐つているのはふたりの縁だと思われます。

「このバカちんめー。学食で、昨日の続きをやってるつかー」「やつぱりバカだろー。お前なんて怖くもなんともなによー。」「なにをー」「事実だー。」

変わらずに仲の良いことです。公道の真ん中で恥ずかしげもなく堂々と口喧嘩でやりあっています。

「……えっと、一緒に登校しますか？」

半ば答えを予想しつつも一応聞きますと

「ああ、佐々木ゆみ！ 」こいつと決着つけなきゃいけないから先に行つて！」

「ゆみー。」Jのバカことじめを刺さなきゃいけないから先に行つてくれー」

遠慮なく先に行くことにしました。

仲良く決闘まがいなことを始めたおバカなふたりは置いていきました。梓ちゃんもよろよろとついてきました。

あのふたり、遅刻したりしませんでしょうか。遅刻して、拳骨のひとつでももらえばいいんですが。

梓ちゃんは先ほどの会話にはちつとも反応しませんでした。いつもは鋭く冷えたツツコミが入るところなのに、それがないと相当疲れがひどいようです。

「うーん」

少しでも梓ちゃんの疲労を誤魔化す材料はないかと辺りを見渡します。おバカふたりでは反応すらしなかつたので、もっと刺激が強いものが必要でしょう。

そうして探していますと

「あ、先輩です」

斜め前方に先輩を発見しました。先輩はランドセルをショットで通学する小学生女兒を観察するため、通学は随分とおおまわりのルートを選ぶのです。なのでわたし達より早く家を出ていたのですが、偶然合流できたようです。

梓ちゃんがぴくりと肩を震わせ反応しました。

「兄貴が……？」

「はい、まだ」ひに氣がつこなよのうだわナビ

よひやくまともな反応を返してくれた梓ちゃんに向かって頷きます。

しかし先輩がいるとなると、梓ちゃんへの罪悪感にばかり囚われるわけにもいきません。わたしの志はノンストップと宣言したばかりなのです。

ぱちりとスイッチが切り替わりました。それでは行きましたよ。やつそくサメのように先輩のハートに食いついて。もう走りださうとしたが

「ねえ、ゆみ」

それを梓ちゃんが止めました。やつそくまでの生氣のない声と違つて、力のこもった声音でわたしの足を止めました。

「ひとつ、やうこえば言つてなかつたけど、私があんたを止めるのは何もあいつが変態だからとこりだけじやないわ

わたしは無言で振り返つて梓ちゃんと向きあいました。梓ちゃんの目は真剣で、まつすぐで、逃げることなんか許されない力がありました。

「梓ちゃん?」

「ゆみ」

梓ちゃんは、言います。

「あこつせ、真正のロココンよ。ガチで幼女にしか興味がないわ」

はつきりと、いつものような嫌悪からの言葉ではなく、  
もつと真摯に訴えかける言葉でした。  
わたしは頷きました。

「知っています」

「まさり、そんな」とは。

「あなたの恋は、叶わないわよ」

「それも、知つてます」

あの日、先輩に恋をしてからずっと。

「辛い思いをするだけよ」

「百も承知」

どうに覚悟はできています。

「あんた……」

「梓ちゃん」

どうか果然とした様子の梓ちゃんに、わたしはこいつこいつ笑いました。

「それでもわたしは先輩が好きなんです」

ずつとずつと、自分の体が嫌いでした。小学生の頃からちつとも成長しない体が、大嫌いでした。年相応でない見かけが、我慢なりませんでした。梓ちゃんやほかの友人達の成長していくさまが、妬ましくなりませんでした。小学生みたい、とからかわれるのが嫌

で、その言葉は恋心をこつぺんに冷やしきるせびにしたくないものでした。

けれども先輩は見抜いてくれました。

先輩がわたしのことを子供扱いする」とは決してありません。それは先輩の愛する幼女を侮辱することになるからです。先輩にひとつて、わたしは間違いなく高校生の女の子なのです。

幼女とそれ以外を見分けるために極限まで磨かれた年齢識別の眼力。先輩を好きになつたきっかけは、極められた真正なまでの口リコンさです。そして、この恋の障害も先輩の真正なまでの口リコンさに他なりません。

皮肉なことには違ひありません。  
でも、それでも。

「梓ちゃん、わたしは絶対止まりません

満面の笑みで、言い切ります。

「そう」

それに梓ちゃんは、ため息を一つ。

そして、いつものかじつとした皿でわたしをまつすぐに射抜きました。

「それでも、わたしは止めてみせるわよ

梓ちゃんの敵対宣言。

わたしは親友からのそれに不敵な笑みを返して、一步、前へ。

「やつてみればいいんですよ。ほらっ

「あ、ちょっと、まてっ

止めようとする梓ちゃんの手をすり抜けて、一歩田、二歩田。わたしは走り出しました。

恋をするのに、真っ直ぐすすむ必要はありません。海の中を泳ぐサメのように、自由に、したたかに、身をくねらせながら、叶わずともいいから、この恋が死んでしまわないよう。わたしは走ります。

「いらっしゃーつ、待てつづつんでしょうー。  
「一やーでーすーみー。」

追いかける親友を軽やかに振りきつて。

途中、駆け寄るわたしに気がついて嫌そうな顔で振り返った先輩に満面の笑顔を送つて。

わたしは、大好きな人に向かつて泳ぐように走りました。

## その9 わくわく（後書き）

なんとなく最終話っぽいですけど、一区切り田です。まだ続きます。

頼みごとというのは、誠意が大切です。

わたしの経験から、人に頼みごとをするには信頼が一番大事なものです。しかしながら信頼とは常日頃から積み重ねるもの。もし初対面の相手や、それに準じる人間相手に頼むとしたのならば、重要なになってくるのが誠意というものです。

ですが、誠意というものは見せるのが難しいものです。なにせそれは無形のもの。そして親しくもない人が調子のいいことを言つていれば、嘘をついているかもしれないと疑つてしまつのが人間というものです。

そこで、土下座というものが登場します。

ある意味、究極の誠意の見せ方であるその土下座を自発的にしたくなる、ということがあるでしょうか。強要されたわけでもなく、自らの意思での屈辱的なポーズをとりたくなったことがあるでしょうか？

ない、という人。それはそれだけつ「こうなことです。自身のプライドを守りきつているのでしょうか。

けれども、人には土下座をするべき時というものが必ずあります。取り返しのつかないミスをしてしまった時、絶対押し通さなければならぬものがある時。そんな場面に直面すると、自然とその人は足を折り畳み、額を地にこすりつけるでしょう。

そう。

「先輩」

いまのわたしのようになります。

「お願ひします」

というわけで、わたしは土下座をしていました。先輩の教室で、先輩の席のまん前で、イスに座る先輩の斜め下で土下座をぶちかましながら何をしているかといえば

「結婚してください！」

求婚をしていました。

土下座というものを人生で初めてやつてみましたが、屈辱感というものは特にありませんでした。そんなことよりむしろ、視界の隅にちらつと見えた先輩の上履きにコロロを囚われました。なめてみたらどんな味がするでしょうか。そんな思考が頭をかすめたのは、お墓に持つていく乙女の秘密です。

こんな公衆の面前で行われた土下座告白が衝撃的だったのでしょう。今日の授業を終えて三々五々に散らばりしていた周囲の上級生の方々が、わたしの行動にざわり、と反応します。

先輩はそんな中ですらも顔色ひとつ変えません。

「嫌だよ」

淡々とすげなく断わられてしまいました。

こんな異常事態においても心を揺らさないとは、先輩の鋼の精神には感服してしまいます。

しかしながらことは予想の範疇です。先輩の精神が堅固な鋼ならば、わたしのハートはきらめく金剛石。その程度で引き下がるわたしではありません。

「なら、婚約でも構いません」

「断る」

「彼氏彼女の関係ではござり得ないが」

「不可能だね」

「だったら、お友達から始まる第一歩でも」

「進展は不可だよ」

「……やつですか」

つれない先輩に、わたしは面を上げました。グレードの高い要求から、徐々に下げていくところが詐欺の常套手段を使ってみたのですが、先輩は一ミリも揺らぎませんでした。はつきりと自分の中で譲歩の線引きが出来て居る人でないと、このはつきません。さすが先輩です。

「わかりました。じゃあこれが最大限の譲歩です！ 先輩！ 一度でいいのでわたしとセツ」

「それ以上は公衆の面前で言つなんあああああー」

わたしのセリフを遮える大声と共に、がらりと教室の扉を開けて人が入ってきました。

「言つまでもなく、梓ちゃんです。

「やつと来たか、梓」

やれやれという感じの先輩の台詞にて、デジャブを覚えます。少し前に同じようなやり取りをしませんでしたつけ。

「なんですか、梓ちゃん」

もう。いいとにかくだといふのに、邪魔をしないで欲しいものです。

「やつねやつ」

わたしの不満を一言で断り切つて、梓ちゃんはすんすん近づいてきました。

「授業終わって同好会に一緒にに行こうと思つたのに、姿が見えないからいどこに行つてゐるのかと探してみれば……あんた何を言おうとしてた？ なにを言おうとしてた？ ナーを言おうとしてた！？」

なんで三回も同じこと聞くんだよ、つか。

「別に、ただわたしと接吻してくださること言おうとしただけですよ。かわいいお願ひではありませんか」

「それはそれで問題だけど、ウソよね？」

「なんで決めつけるんですか」

まあ、嘘ですが。

とはいえ正直に認める必要もないんで素知らぬ顔で、さうじと言い返します。

「嘘だつていうんだったら、わたしが何を言おうとしたのか、聞いてみてくださいよ。ほら、はい、ビード」

「あ、う……くつ。い、こんな人前でセツ、セツ……ああもうつ。ともかく、卑猥な単語を言おうしないのー。女の子でしょーーー？」

顔を真っ赤にして口ごもる純情さは確かにかわいいのですが……まったく。梓ちゃんの乙女っぷりにはたまに呆れてしましますね。ここは少し、女としての身の振りかたを教授しないといけないでしょ。」

「いいですか、梓ちゃん。別に恥ずかしい事でもなんでもありません

んよ。とこりか、そもそも恥ずかしい」とじゃないんです。」  
「うのは時には女のほうからねだることも必要なんですよ。いつまで  
も受け身だと、どうしたってマンネリ気味になることがありますか  
らね。それに世の中の男女関係には、肉欲から始まるものも多々あ  
ります。わたしは先輩を籠絡する手段にそれを使おうとしただけで  
あれ梓ちゃんなんですか首元を掴んだってわたし猫じゃないので皮  
伸びたりしないので掴かめないですよというかいえだからつかめな  
いってひたたたつちよつと梓ちゃん握力いくつですか！？」

「あはは、先輩がたすいません。うちのサメっ子が暴走しちゃって。  
春になつて浮かれてちよつと頭バーになつていいだけなので、この  
子の言動は微塵も気にしないでください。欠片も記憶にとどめない  
でください。一切合財を消去してください兄貴の存在と共に」

さりげなく先輩を『ディスる梓ちゃん』に、表現のとおりに首根っこ  
をつかまれずするすると引っ張られて行きました。

先輩の教室での一悶着を終えた放課後。土曜日なので早く学校が終わり、太陽がまだ高いその陽気の中、わたしは電車に揺られながら無言で腕を真っ直ぐ伸ばして低いほうの吊革につかまっています。なかばぶら下がりになりかけてしまっているのは、身長的にいたしかたないことです。

ちなみに、一緒に電車に乗っている隣の梓ちゃんは普通に吊革につかまっています。百十度ぐらいの程よい角度で、いかにも自然に捕まっています、という感じです。

なんて羨ましいことでしょう。

「……」  
「……なに？」  
「……いえ」

じいーっと見つめていると、梓ちゃんが気味悪そうにしてきました。いけません。視線が恨みがましくなつてしまつたでしうが。わたしは不審そうに聞いてきた梓ちゃんからひょいと視線をそらして

「ただ単に、服を透かしてブラ見えないかなと思いまして」「なつ」

適当にじるまかすと、梓ちゃんは瞬間に顔を沸騰させて脇を押さみました。

「ああ、あんたなにバカ言つてるのよー。」

「気にしないでください、梓ちゃん」

淡々と感情を込めずに言います。別にプログラミング見えたつていいと思うんですけどね。あれは隠すためにあるんですから。

「梓ちゃんはそうやって、周りの男に幸せを振りまいてくれればいいんですね」

「私は不幸になるわよ！？ ていうか、もしかして見えてた！？」

「大丈夫ですよ。見えてないです見えてないです」

「説得力がないわよ！？」

とにもかくにも、どうやら誤魔化せたようです。しかし電車は嫌ですね。身長差がはつきりと出てしまう場所ですから。

ただ、わたしのテンションが低いのは、それが理由ではありません。

ん。

「ちょっととゆみ。機嫌が悪いのはわかってるけど、あんた、いつもならもうちょっと自制するわよね？」

自分の身だしなみを確認して、本当に見えていなかつたと確信したのでしょう。いつもの調子を取り戻した梓ちゃんが尋ねてきました。

わたしは、そっと顔を傾けます。

「実は……アノ日なんです」

「公共の場でこれ以上に下ネタを続けるような、私にも考えがあるわよ……？」

「すいませんでした。大変反省しています」

「こまのは自分でもどうかと思つていたので、素直に頭を下げました。

「でもですね、梓ちゃん。機嫌が悪い時のわたしって、いつもこんなものですよ?」

「うわ、こいつ自覚してるわ……」

「そうです。はつきりと自覚していろぐらうこじいまのわたしは機嫌が悪いんです。嫌そうに顔をしかめた梓ちゃんに反応する氣すら起れません。

「あーあ。それにしても、世界、ほろびませんかね」

陰鬱な気分丸出しせいでいます。

いつもなら、同好会の日はハ割がたテンションマックスになるのですが、本日は残念ながら、会議ではありません。ボランティアの日です。今日は、先輩が梓ちゃんととの論争の結果に勝ちとった、児童福祉の日なのです。

先輩と一緒にいられるのはまあいいとして、問題は児童福祉というボランティアの内容です。

「滅びないわよ。ていうか、いい加減にしなさこよ。わつきのぶ、ブラが見えた、とかこう言いかかりといい、不機嫌を私に押し付けないでくれない?」

「べつに、別にですよぉひっ」

「がたん」とんと電車に揺られながら梓ちゃんと会話をします。

今日は土曜日なので、昼前にはもう授業は終わっています。あの土下座を終えてから直接、同好会員三人でボランティアを行う施設まで向かっているのです。

ちなみに梓ちゃんの希望により、先輩とは一車両ほど離れています。先輩にこんなどうどろした状態を晒すわけにもいかないので、わたしとしても好都合です。

今日のボランティアは、児童福祉です。そつ。わたしがあの低俗生物ゴキブリよりも嫌うくそガキどもの相手を 少々口が過ぎた気がします。まあ要するに、親しくもない生意氣ざかりの児童の相手をしないといけないのです。

苦痛、の一言です。

「ゆみ、あんたは……」

そんなわたしの内心を察してか、梓ちゃんは呆れ気味の口調です。

「本気で、子供が嫌いなのね」

「子供なんて、幼児なんて滅びればいいんですよ」

「それ、人類も滅ぶつて……って、ああ、成程」

梓ちゃんも、先ほどの言葉の真意を察してくれたようです。そうです。世界なんて、人類なんて滅びればいいんです。

「子供なんて、いなくなればいいのに……ふふふ、ハーメルさんでも復活して子供をさらってくれればいいのに」

「不謹慎な発言ね……あんた、誘拐事件起こしたりしないわよね?」

「失礼な」

一割ぐらいには本気で言つてそうな梓ちゃんに、一応フォローを入れます。

「いくら子供が嫌いでも、誘拐なんて面倒なことはしませんよ」

むしろ子供が嫌いだからこそ、そんなことはしません。誘拐するということは、その後に連れてきたガキの面度を見なければいけないのです。

「そもそもわたしは、卑怯なことは基本的に嫌いなんです。真正面からぶつかって、当たって砕けて再チャレンジです。……まあ、それでもダメだつたらわかりませんが」

「それはよかつたわ。でも、そんなに児童福祉のボランティアが嫌なら、兄貴を論破するのを手伝ってくれてもいいじゃない」「好きな人の味方をしたいのは、人情じゃないですか」

「黙りなさい」

「もしくは恋情じゃないですか」

「黙れつったでしょアホ」

たまに梓ちゃんは理不尽になります。

「それに誘拐事件の心配するなら、どう考へても犯人は兄貴のほうか」

「あはは、そんなまさか」

「まさか?」

「…………なんでしょうね」

どうしましょう。否定の言葉を続けることが出来ませんでした。これでも口はまわるほうですが、とつさに否定できません。先輩が女子児童を甘言でかどわしている情景がまさまさと思ひ浮かんでしまいました。

いやまあ、梓ちゃんがしつかり監視してるのでそんなわけないとわかっていますが、ね? 何というか、やっぱりそういうのって、ね?

「まあ、ほんとにそんなことしたら、冗貴は抹殺される」となるけどね。私に」

「梓ちゃんが見張つてる限り、先輩はしないでしちゃうね、そういうことは。あの候補は……嫉妬に狂つたプログラマーが、子供狩りを始めるとかですかね？」

「冗貴のことになると私の沸点は低いわよお、ゆみ？」

軽い冗談だったのですが、「こ」「こ」、と効果音が突きそなほど迫力あふれる笑顔で梓ちゃんが迫ってきます。仁王もかくやという存在感にわたしはたじりと後ずさり

「ジヨークジヨーク、冗談ですかから、ここは電車内ですから、ね？落ちつきましょう」

「つたぐ。ゆみは自分の都合のいい時だけ常識ぶるんだから……それにしても、ボランティアが嫌なら行くのやめる?」「こりますよウ」

元の流れに戻った話題に、唇をとがらせながらもそういういます。ぶつくさ文句を言つていたため説得力はないかもしませんが、覚悟はとっくに決まっているのです。

「先輩の為なら火の中水の中ベッドの中、どこにでも飛びこむつもりですもん」

「いや、ベッドはない」

やたらきつぱりと梓ちゃんが否定します。

「じゃあ、百歩譲つて腕の中でも」

「はいはいここは電車の中だから、公共の場所だから、黙つて静かにしなさいねー」

電車でしゃあしゃあ騒ぐの少女と高校生の姉妹だといいますのに、兀々と顔にカバンを押し付けられ、わたしは口をふさがれました。

『「こんばんは。今法口りでおなじみ、佐々木ゆみです!』

とか、そんな血口紹介したらこの人たちほどこんな反応するだろ?、などとくだらない上にやや自虐的なこと思いながら

「佐々木ゆみです。今日はよろしくお願ひします」

完全で完璧なる営業スマイルで、わたしは職員の方々に無難な自己紹介をしました。ちなみにこの笑顔が剥がれたら、下にあるものはとてもとても人前に出せたものではなくなります。

予定通りボランティアの施設に到着したのです。そつやつて職員の方から軽い注意事項などを聞いた後、児童の集まる場所に案内されました。基本的に、児童といるのはボランティアのメンバーだけということはありません。職員の方がしつかり目を光させてくれています。

「……大丈夫?」

そんな中、梓ちゃんがそつと問いかけてきました。まるでわたし  
がぶつちんして、子供を片端から略奪し始め黒魔術の生贊に捧げる  
んじゃないかと心配しているかのような表情です。

ちなみに先輩は早くも児童の中に入つて遊んでいます。笑顔で楽  
しそうに児童地と触れあつているその絵面は、なんとも不安に胸が  
かき乱される光景です。どうしても警察を呼びたくなつてしまふの  
は、致し方ないことでしょう。

「まあ、何とかなります。梓ちゃんは先輩を見張つてきてください。わたしの心の耐久力はレベルが高いので、くわがもとい、子供たちのやることで傷ついたりはしません」

わたしはにこにこ笑顔のまま頷きます。児童福祉のボランティアはもう何回かやっていることですしね。ストレスのかからない時間の過ごし方については学んでいます。

「いや、兄貴はそうだけど……誰もゆみの心の心配なんてしてないわよ」「え？」

ですが、梓ちゃんの心配はいつもこちらに向かはれていたわけではないようです。

「あんた、子供にあたりちらしたりしないでよ？」

なんてことを言つてくれるんでしょうか、この親友は。

「あの、梓ちゃん」

親友からのいわれない中傷に、思わず眉が下がり情けない顔をしてしまいました。

「わたし、そんなに信用がありませんか……？」

「最近のあんたはね、これっぽちも信用できないのよ

はっきりと言いつてくれるんじゃないですか。なんですか。喧嘩寸分も迷わず断定してくれます。

はっきりと言いつてくれるじゃないですか。なんですか。喧嘩

を売つてゐるんでしょうか、梓ちゃんは。

「大丈夫ですよ。わたしの自制心はそつ簡単には崩れません!」

「だから最近のあなた見ると、とてもそういう思えないのよ……」

言葉を重ねてもまだ信用してくれません。心外です。先輩に対しても、わざと外しているんですよ。

「まあ、いいから梓ちゃんは早く先輩を見張つてきてください」「そこまでこうなら信用するけど。ま、ほゞほゞに無理しなさいね、サメツ子」

素敵なお言葉を遺して梓ちゃんは子供のほうに向かって行きました。それを見送つてから、わたしは改めて子供の群を眺めます。

梓ちゃんが先輩から女子児童をひきはがしてくれるの、わたしとしても安心です。それに梓ちゃんは先輩に似て、というのは語弊がありますが、わたしと違つてもともと子供好きなのです。ショタとかそういう属性はなしにして。

「はあ

わたしは笑顔のまま憂鬱のため息をついて、とりあえず用意していた紙芝居をカバンから出しました。これなら、読むだけですみます。それに、各自自由に遊んでいい時にお話を聞こうという子は大概おとなしい子なので、楽なんですね。

「おねーさん、自作の紙芝居しますよー。聞一きたーい子ーはこいつにやーいで。いまこじやないと聞けないスペシャルですよー」

来なくていいよーとか思いつつも呼び掛けると

「おねえさん?」 「ちがうよね」 「でもちよつとはおねーちゃん?」  
「でもあるおねえちゃんちょっとちがあう」 「あっちのキレーなお  
ねーさんみたいじゃない」 「カツ」「ーおにーさんともちがあー」

とか遠慮ないことを言いながらも四、五人寄つきました。

黙れやガキども と喉まで出かかった言葉は笑顔で飲みこんで  
おきます。

何せわたしは大人ですからね。それにわたしがどんななちゃんちくり  
んなかつこをしても、最低でも十歳には見えるはずです。ざつと見  
たところ平均六歳、最年長でも八歳のガキどもに同一視されるのは  
納得いきません。

「はいはーい。静かにしてくださいねー」

集まつたガキどもに呼び掛けましたが

「はーい」「しづかにする」「だまるだまる」「しづかだよー」「  
おねーちゃんうるさいー」「うるさいのおねーちゃんだけー」

「うるせえガキどもです。」

「お姉ちゃんは良いんですよ。いまから喋るんですから」

「ううん、しかしガキどもの相手をしていると自分の自制と分別に  
限界を感じますね。梓ちゃんの心配もあながち完全な杞憂というわ  
けでもないのが、何とも悔しいです。

ま、ともかく、紙芝居の始まり始まりー。

「おーきゅうつってなに?」「お城のことですよ。ほひ、この絵の」「まじょつていいまじょ?」「ただのおばかさんです。じぢらかと」「いつと、ジジで世界を滅ぼすような」「あーかみしばいやつてるぞ!」「はいはい、途中からでもいいならそこに座つて、静かにしてくださいね。なんならおねむでもいいですよ?」「せかいつて、ほろぶのー?」「そうです。滅びちゃうんです、世界つて。そう、たとえば、子供が減っちゃつたりするとほろぶんですよ、世界つて。めでたいですね」

「ああ、途中からきた君? 驚いたいならあつちの綺麗なお姉さんのスカートでもめくつてきてください。運動組はあつちです」「わかつたよ、たいちょー!」「めでたいつて?」「隊長……? なぜ……? あ、めでたいとこうのは、良いことどうことですよ」「たいちょー!、あのおねえさんズボンだよっ! ぼつぎょりょくたけーよ!」「ちつ。そついえば梓ちゃん、ボランティア前に着替えていましたね。じゃあ、じゅれつぐ振りしておっぱいにでも触ればいいです。君にはまだそれが許されますよ、隊員!」「さすがたいちょー! ぱねーめいれいだ!」「ねえねえ、こどもになくなるためでたいの一?」「ええ、すつつごい良いことです」「でも、いじもいなくなると、おねえちゃんもいなくなつちやうんじゃあ……?」「自分の心配より、わたしですか……? のですね、お姉ちゃんは俗世間でロリータに分類されるあなたたちのような子供ではなく、合法口リという属性に含まれる人種なので、子供がいなくなつた世界でもいなくなつたりしないんです。ロリータと合法口リという、浅学な人間には同じに思えてしまつ言葉に、実は大きな隔たりがあるのは知っていますか?」「え? え?

「

とか、全然大人しくならないガキどもに補足を入れながら紙芝居を続けていますと

「おいらメッシキはがれてるわよ」

がすっと頭を殴られました。

梓ちやんです。子供に懐かれまとわりつかれて、なんだかやや着衣が乱れています。

「い、痛いですよつ」

「なあーにを教えてるのかしら、ゆみー？」

わたしの正当なる抗弁むなしく、梓ちやんが迫力ある笑顔で脅してきました。反射的にびくっと肩がふるえます。

「これは少しお仕置きが必要かしり?」

「ち、違うんです梓ちやん。わたしは子供たちに将来役に立つ知識を植えこもうと思つて……！」

「植え込もうとか言つてる時点でもない」となのは確定ね

必死の弁明ですが、無視されました。

梓ちやんはわたしから子供の集団に視線を移して、ぱんぱんと手を叩きます。

「はーい。みんな休憩がてらこのお姉ちゃんのお話を聞こうねー

？」

『はーい』

お行儀のよい元気な返事が返ってきます。団結力が、じつちのメ

ンバーとは段違いでした。

「げつ」

梓ちゃん、ガキどもをいちに押し付ける気まんまんです。わたしの嗜好を理解した、すいせい効果的な嫌がらせです。

「『げつ』？」

「何でもないです……」

わたしのうめきをオウム返してきた梓ちゃんの笑顔に逆らへる気はしません。

しゅん、とうなだれて、紙芝居を開くことにしました。

「はあ……んじゅ、再開しますね」

## その絵本　ルルルウ（前書き）

ゆみの作った絵本の内容です。本編とほとんど関係はありません。ついでに人によつてはものすごく読みにくくできています。読み飛ばしていただいても何ら支障はありません。

「むかしむかしの話です。

とある国にはあるひとつのお姫さまがいました。

お姫さまは、自分がお姫さまだとこつのがあまり好きではありませんでした。

といつより、自分がお姫さまだとこつのことなんの意味も感じられなかつたのです。

お姫さまの上には、ふたりの姉姫さまがいて、ふたりの兄王子さまがいました。

お姫さまは末の子で、それゆえに王様からも王妃様からもかまわらず見むきもされませんでした。

王宮の離れに住まいをあたえられ、側仕えの侍女もひとつがいるきりです。

それを恨んだことはありません。

姉姫さまがたや兄王子さまがたをひらひやんだこともあります。

そもそもお姫さまは豪奢なくじらじら、ひとにこじしづかることにも興味はありませんでした。

ただ、自分がいなくとも王宮はなにもかわらないのではないか？

「うひ思ひと、やほりお姫さまには自分がお姫さまである意味など、こゝやしない氣がするのです。

だからお姫さま、自分がお姫さまだとこゝのがあまり好きではあつませんでした。

そんなある日。

お姫さまは魔女と出会いました。

『一の姫ちやんのくやはじいかな』

やう話しかけられたのは、お姫さまが勉強のあいま、ぶらりと庭をさんぽしていたときでした。

話しかけてきたのは、くねくねローブをきた妙齢の女性です。

『……だれですか、あなたは？』

国の姫をちやんづけよばわつするこんげんを、お姫さまは初めてみました。

『私？ 私は魔女だよ…』

『へえ』

血口紹介になつてこるよつでなつてこません。

魔女を自称するかのじょは、見かけのわりにまことにぶん子供っぽくかんじられます。

『それだけでは、だれだかわからないのですが

『わづだね』

お姫さまがあらためて聞くと、魔女はおお、と手をならしました。

『なら東の森の魔女といえばわかるのかな?』

そのことばに、お姫さまは田をみひらきました。

東の森の魔女。

わづよばれてこる魔女はこの国こあばんの、いえ、この大陸でいちばんにちがいない魔女です。

その魔女はわざわまな魔術をつくりあげた、えらい人なのです。

もう五百年も生きてこるとこなのです。

かの魔女に不可能はないと、つくれぬものはないとしたたえられた魔女なのです。

お姫さまは、魔術のたぐいのものに興味がありましたから、その

名称はよくじつていきました。

『「つかをつかないでください』

『ええい、つかじやないよー。』

『あなたみたいにばかっぽい人がそんなえらい人のわけがありません』

『なんとー、ばかっぽいー？』

『身分詐称はけつこうなじゅうせいになりますよー。』

『だから本物だつてー。』

ひつしにべんめいする魔女に、お姫さまはなつとくはしないまで  
も疑いをとりさげました。

『まあ、あなたがかの魔女だとして。姉姫さまに、なんのようです  
？』

『いろいろと研究のきよかをとりにお城にきたんだけど、なんだか  
一の姫ちゃんにあつてくれつてたのまれちやつたの。』

魔術に興味があつて、私の話を聞かせてほしいらしいんだけど…

…』

魔女はそこまで、えへへといまかくよつてわらひます。

『みちに、まよつちやつて』

『そのとしド、まい』ですか

あきれたよ「ひ」ご「う」お姫さまですが、内心、す「い」しょもじりくへあります。

けつ「い」つ前に、お姫さまも東の森の魔女にあわせてもら「え」ないかと、父様にたのんだことがあるのです。

それをな「い」がしろにされたことになります。

姉姫さまに非はな「い」こ「し」ても、よ「い」だつあれたよ「ひ」で気分がよくあります。

『……父様は、この王城せ、やつぱりわたしに興味がないのですね。いつむか、あこやべくちこやべぬいた声は、魔女の耳にからひじてひつかつたて「い」です。

『ん？ なにかいつた？』

『いえ、なんでもありません。それよ「ひ」

す「い」と顔をあげたお姫さまは、ひとつ決意をしていました。

『姉姫さまのへやに案内するこやぶさかではあつません。

ただ、ひとつ頼まれごとをきこてくれますか？』

だからお姫さまは魔女に頼んでみました。

『わたしを、お姫さまではなくしてください』

魔女のこたえは。

『別にいいよ?』

あつけらかんとした、是でした。

「数日後。

魔女は、お姫さまにとある種をわたしました。

魔女がつくつた、とてもチカラのこもった種です。

『これはどういうものなのですか』

お姫様さまは魔女にたずねました。

魔女はこたえました。

『それを土に植えると、どんな条件だつて芽をだして茎をのばして、  
きつかりちょうど一ヶ月で花を咲かせるんだ。

そうして花を咲かせた瞬間、その種を植えた人間のことを、みん

な忘れてしまうんだよ』

みんな、とお姫様がおどろくと、魔女はそつだよ、と頷きました。

『大陸中のみんな。

誰ひとりとして例外なく』

ただしね、とさとすように魔女はつづけました。

『その代わりこの種を植えた人のことを、ここから大切に思つて  
いる人間は、花が咲いたつて忘れてくれない。

それどころか、絶対に忘れられなくなるんだ。

その記憶がつすまることすらない。

お姫さまとつてみればとつても都合の悪いことにね。

それでもいいならこれはあるけど、どうする?』

魔女のその問いに、お姫さまはすこしもまよつたりはしませんで  
した。

『べつに、構いません』

悲壮感などからもみせず、お姫さまは当然のようにいいました。

『わたしを大切に思う人なんて、この大陸には一人もいませんから』

お姫さまの「たえに、魔女さちよつとやみしそうな顔をしました。

魔女からもらつた種は、なんの問題もなくすくすくとそだつていきました。

こつたいこの草はなにを養分にしてくるのでしょうか。

庭のかたすみにておとづれただけで、みずやつもしてしませんでしたが、それでもその草は葉をのばして葉を広げていきました。

庭師には「これはけつして抜かぬよう厳命をしておきました。

『姫様、これはこつたいなんの草ですか』

不思議そうに、聞いてきます。

『長年の職をやつとつますが、こんな奇妙な草は見たことがないですよ』

庭師の疑問に、お姫さまは魔女から聞いたこの草の名前で「たえました。

『魔女からもらつたの。

忘れるな草、といひじこよ』

やうやつて種をつえてから、あしたでひよつと一ヶ月にならば。

お姫さまのへやに、魔女がたずねてきました。

『あしたで花が咲くね』

ほほえんでいつ魔女に、お姫さまはうつけなくつなびくだけでした。

『はひわて、あしたが経つてなんにんお姫さまのことをおぼえて  
れるかな。

お姫さまはびつねむづへ..』

お姫さまのよつすなびきにもとめずに続ける魔女に、お姫さまは  
かんしんのなむけにこたえました。

『ひとりだつておぼえているさすがありません』

お姫さまのその返事に、魔女はたのしげなわらじいえをもらしました。

『ふふ、それははどうかな』

『……なんなのですか?』

魔女のようすをさすがに不審におもつたお姫さまですが、魔女は  
それによじたえず窓のそとに視線を向けました。

『ねえ、あの草、なにを養分にしてそだつてるとおもひへ..』

『さあ?』

はなしを逸らされたのはきこくはないですが、ちょっと興味があつたことなのでお姫さまはそのしつもんにのつかることにしました。

『へへー、やつぱりわからないか』

得意げにじらす魔女に、お姫さまはちょっとむりとしました。

『わつわとつづけてください』

お姫さまがつよくうながすと、魔女はあつさりと種をあかしはじめました。

『あれはね、ひとの記憶を栄養にしているの。

ねつこが地面をとおして、あの草を植えた人にかんする記憶をすいあげているの。

そうしてたくわえられた記憶をはきだすために花を咲かせるんだ。

花が咲いた瞬間、記憶は人のものでなくなる。

記憶は、花となつてかれあがる。

だから人は忘れてしまうの。

あの草を植えた人のことを『

へえ、とかんしんするお姫さまに魔女はやわらかくほほえんでつ

づけました。

『お姫さまの植えた草はすいぶんおおきくなつたね』

庭のかたすみにある草をすうとゆびさしていいます。

『ふつうは、あんなにおおきくならないよ？

せいぜい、あの十分の一ぐらい。

それだけお姫さまは人の記憶にあつたといふことなんだ。

それは、すばらしこじじゃないのかな

魔女のそのことばに、お姫さまの表情はいつせこひりませんでした。

『そうですね』

むしろ淡々とお姫さまのことばをつむぎます。

『かりにもわたしは姫ですから、知っている人も多いでしょ？

そして、わたしはそれだけの数の人間になんともおもわれていな  
いことになりますね。

あの草は、植えた人のことを大切におもつている人間の記憶はす  
えないのでしょうか？

ふつうの十倍ですか。

そんなに草がおおきくなっているのがその証拠です』

魔女はお姫さまの顔をすこしかなしげな表情でみていましたが、あきらめたようにため息をつきました。

『わうだね。

人が人を大切におもひこなは、あんな草ぐらいじやすえない。むりにすおうとすれば、強固にていこうじて、むしろその人の記憶にていぢやくする。

その人が絶対に忘れないくらい、記憶がつまるる」とのないくらいよくつよくね』

魔女の『じよせん』、お姫さまはやっぱりなんの興味もしめしませんでした。

わうして、花が咲くその日。

お姫さまは、じつと窓からあの草をながめていました。

お姫さまはただただ無表情です。

その表情に、自分の記憶がみんなのあたまからきこえることについてのみれんやかなしみはこたさうかがえません。

そのかわり。

花が咲くのをたのしみにしているよつた様子も、いつぞこありま  
せんでした」

## その論本 むりむり (後書き)

単語チョイス、およびひらがな表現はものすごく適当にやっています。  
「はじめんなさい。しかも」ともあうつか、途中で終わっています。  
二つぐらいあの話で、結末を付け足す予定となっています。

## その14 たらたら

窓枠から流れていく風景は、夕日で茜色に染まっています。ボランティアを滞りなく終了させた帰り道、電車に乗っているわたしは流れしていく風景を田で追っていました。

「ゆみ……あんた、子供たちと盛り上がってるかと思えば、途中でもう紙芝居関係なくなつてたじやない。私が入んなきや、どんな脇道それでたか……」

「不思議ですね」

呆れ気味の梓ちゃんに、平然と答えます。くそガキどもと離れたので、精神力がだいぶ回復してきました。梓ちゃんの皮肉などへどもありません。

中途半端な時間だからか、この車両にはわたしと梓ちゃんしかしません。先輩は、何か用があるとかで駅までの途中で引き返して行きました。

人がいないので、わたしと梓ちゃんは遠慮なくきやあきやあと騒ぎます。

「どうか、あれは幼児には向いてないとと思うわよ。子供には難しい言葉多かつたし、なんか紙芝居というより、設定からしてどつかの「バルトみたいだつたじやない。子供相手だつたら、もっとふわふわした感じの内容のほうがいいと思つけど

「うーん。まだどの年齢にどんな話が合つかわからないんですね

あの紙芝居は一ヶ月かけて作り上げた大作だつたのですけど、からり回ってしまいましたね。梓ちゃんの軍勢と合流したあの後もガキ

どもが『あやあやあやあ騒いでいたために、最後まで読み終わることはありませんでした。特に質問攻めにされていましたが、単語のチョイスとか難しそぎます。年齢が混合されている時は、何歳を基準にすればいいんでしょうか。だれか教えてくださいな。

「……ねえ、ゆみ。あの絵本の主人公って、あんた?」

そう問い合わせてくる梓ちゃんは、やや聞きづらそうでした。

「……そうですね」

なんでわかるのじょうか。

「安心してください。ハッピーハンドなお話なので  
べ、別に心配なんてしないわよ……」

言いつつも、心配性の梓ちゃんはほつとじこるようでした。  
あの紙芝居の主人公は、自分も含めて、大切なものがいらない女子。他人も自分も捨てて、生まれ変わりたい女子。正確に言うなら、あれは、幼いころのわたしの願望です。

ですが

「ぶっちゃけると、そこまで自己投影したわけではありません。児童文学とか童話を参考にしてみたんですけど

「あれが? ていうか、パクリなの?」

「オマージュです。完全なオリジナルをかけるほど創作意欲にあふれているわけでもないので、『モモ』と『エルマー』と『う』と『ハリー・ポッター』シリーズその他に童話諸々を『』たまぜにしたんですよ」

「それ混ぜ合わせたら、何でもできそうだけど……ていうか、どう

でもいいナビなんで全部活劇系の話なのよ。……あ、活劇で思って出したけど。あんた、男の子けしかけてきたでしょう。切れ長の田が、じりつ、と睨みつけます。

「はて」

なんでばれたんでしょうか。ついと横に田を反らします。最終的には転んだ振りでズボンを引きおろしてパンツを確認しろ指令を下したのですが、上手くいったんでしょうが。残念なことにあのあと報告がぱったり途切れてしましました……。とつあえず、しらばっくれます。

「なんのことですか？　Hロガキ隊員のことなんて知りません」「やつぱりあんたが隊長じゃない！」

ばぐらかしたといつて、梓ちゃんは何故だか確信を深めてしまいました。

「違います。あのガキが勝手に隊長って呼んでいただけであって、わたしさそれに乗つて色々とシニシショーンを下していただけです」「なにが『だけ』なのかしひ。語るに落ちたわねえ。自白してるわよお……」

まきと指を鳴らしていましたが、やがては、とため息をつきました。

「ま、子供のやういとだし良いけども…… ゆみは子供嫌いな割には、やたら子供と打ち解けるわよね」「せうですか？」

「まへつと瞬か。そんな自覚はありませんが、梓ちゃんの田だと

そう見えるのでしょうか。

「もうよ。ゆみは母性ないけど、責任感強いから、面倒見いでしょ？ それに何より子供って勘が鋭いから、本性見抜いてるのよね……あ、電話」

やや聞き捨てならないことを言いかけていた梓ちゃんがふと呟いて携帯をとりだしました。着信音はなつていませんから、しつかりマナーモードにしてあるようです。

着信を確認した梓ちゃんが、ふと眉をしかめました。

「あれ、登録してない番号からだ」

「梓ちゃん、母性がないってなんですか。わたしのこの先輩の全てを受け入れられる海のような大きな心では足りないというんですか。あれですか。母性って、海ではなく山ですか。そういう心よりも、胸ですか。母性って、ょせんは胸なんですか！？」

「ええい、うるさいわよせめて本性のほうシッ！」などなによつ。あ、もしもし」

電車内ですが、他に乗客はいないので良いと判断したのでしょうか。周囲を確認した後、梓ちゃんが電話にしました。

「はい、藤堂です。あ、今日はありがとうございました。ええ、はい……え？ いえ、すいません。心当たりは……はい、それでは」

「一言二言、言葉を交わし電話を切りました。梓ちゃんは心配そうな表情で、通話を終えても携帯を見つめていました。

「どうしたんですか？」

「いや、さつきの施設からだつたんだけど、子供が一人いなくなつ

たんだつて

いなくなつた子の名前を聞いて、するりと顔が浮かびました。  
紙芝居の時『子供がいなくなるのは良いこと』といふ説明にくだりのとき涙目で余計な心配でわたしを気遣つてくれた、あの女の子の名前でした。

「あの子ですか……」

「なんか私達が帰つてからすぐこなくなつちゃたらしくて、ついてきてないかつて聞かれたんだけど……」

梓ちゃんの視線に、ふるふると首を横に振ります。心当たりはありません。

「そうよね……」

梓ちゃんも難しい顔をして、あいに手をやります。

「このあたりじゃないにしても、都心の方じや行方不明事件もあるみたいだし、しんぱ、い……」

梓ちゃんが、お終いまでいわず語尾を途切れさせました。

「どうしました、あずか、ちや……」

不自然なそれについて、何事かとわたしも追及しようとして、途中でぴたりと口を閉じました。

しん、と沈黙が落ちました。

がたんごとん、と電車の車輪が沈黙を埋めます。わたしと梓ちゃんが同じことを考えているのは明白です。

「…………… そりいえば、兄貴は？」

「…………… えっと、その、まあ？」

聞いた梓ちゃんも知らないふりしたわたしも、先輩の行動は把握してあります。

繰り返しになりますが、帰りの途中で先輩は用があるとかで途中で引き返していました。

ただ、それを言葉に出したら何かが終わるような、そんな予感があつたのです。

『あつと梓ちゃんの顔から血の気が引きました。

「まさか、兄貴の奴、マジで……？」

「あ、あの、梓ちゃん。大丈夫デスよ？ わたしは、タトエ友達の身内に犯罪者が出ても、気二しないというか、変わらず友達ですヨ？ むしろ、身内になりたいというか、その……」

さりげなく混ぜた先輩に対してのアプローチに、いつものようなツッコミは入りませんでした。

その代わり

「氣を、つかわなくていいのよ……」

地獄の底から這い上がつて来たような、おどりおどりしこ声が返つてきました。

「あ、梓ちゃん……？」

「身内の不始末は、身内がつけるわ……」

その無氣味な声色に、ひく、と頬がひきつりました。

これは、この前の徹夜明けの時にもその片鱗をみせていた梓ちゃんの病みモードです。

「大丈夫……もしものこの家に帰ってきたら、私の目の前にその姿をさらしたのならば、すぐにでもゴーモンして全部聞きだすわ……それから、世間が納得するような、セイサンでザンコクで、目をそむけたくなるようなショケイをするから……あ、大丈夫よ。その後、私もちゃんと両首するわ……」

「か、覚悟は立派だと思いますが、リッパな行為とはいえませんねつ」

先輩が殺されるのは、わたしも見逃すわけにもいきません。といふか、そもそも先輩が犯人と決まつたわけでもありません。さつきは先入観から思わずあんな風に言いましたが、そもそも先輩が犯人だと考える方が無理があるので。

「え、ゴーモンするにしても道具がないって……？　あは、安心して。一般家庭にある大工道具や調理器具は、リッパなゴーモン器具になるのよ……金槌、のこぎり、包丁、ピーラー……あは、あははははは」

梓ちゃんが超怖いです。

「梓ちゃん、落ちついてください。わたしの考えですが、先輩は犯人ではありません」

そつか、梓ちゃんはツンデレというより、ツンヤミなんだ誰得ですかと思いつつも、梓ちゃんを落ちつかせるために言い聞かせます。

「え？」

あらぬ方向を向いてた梓ちゃんは、空うな笑い声を止めていつちを見てくれていました。

「それ、ほんと……？ 誘拐犯は、兄貴じゃないの……？ うちは、犯罪者の家族だって罵られなくてすむの……？」

「はい」

すがりつくような声に、断言します。ていうか、断言しないと藤堂兄妹が色々とまざり事態に陥ってしまいます。

「兄貴、ちっちゃな女の子集めてハーレム、とかやってないわよね……？」

梓ちゃんは想像力がかわいらしい感じにたくましいです。

「現実的に考えてください。高校生に、そんなことできるわけないじゃないですか」

涙目で可愛くなつている梓ちゃんに、笑つて保証してあげます。実際問題、小さな子供を高校生が長い間監禁するなんて不可能です。その場所を用意する段階で、もう無理でしょう。

「だから先輩は、おそらく帰りの途中での女の子がはぐれて迷子になつたのに気がついたのでしょうか。それで引き返して保護しているだけです」

あの女の子が何で施設を抜け出したのかまではわかりませんが、そんなどひで間違いないはずです。

「で、でも、ゆみ……」

それでもまだ先輩誘拐犯疑惑を消し去る事が出来ないのか、梓ちゃんは弱気モードのまま聞いてきました。

「だつたら、何ですぐ施設に帰してあげないの……？　ていうか、そもそもどうして女の子が迷子になつたつてわかるのよ……？」「いやいや、先輩には幼女感知機能があるではないですか」「え、なにそれ？」

初耳だつたのでしょうか。梓ちゃんは畠然とした様子で、ぽかんと口を開きました。

そんな梓ちゃんに、わたしは自分の胸をどんどん叩いて保証します。

「でも大丈夫、安心してください。わたしも最近、先輩感知機能を取得しました。先輩の幼女感知機能ほど精度はありませんが、何となく先輩のいる方向距離は感じ取れます！　子供を施設に帰さない理由はわかりませんが、次の駅で降りて先輩を追つかけ事情を聞きます。大船に乗つたつもりで待つていてください！」

「え、いや、だからそれなに？　ちつきからさも当然のように語つてるけど、その感知機能？　とやらば、人類についてるオプションだつける？　なに？　ない私が変なの？　違うわよね？　あんたらが変態なだけよね？　んん？　現実的な思考はどこにいったの？」

「なにを言つてるんですか梓ちゃん！　これは現実に備わっている愛の特典機能です！」

「ちょっと黙れバカ」

いつきに平常心を取り戻した梓ちゃんが、きつぱりと言い切りました。

「ば、バカつて酷くないですか……？」

「あ、いや、ごめん。確かに親友に向かつてひどい口をこらやつたわね、私。言葉のチョイスを間違えたわ。ゆみ。改めて懇切丁寧にあなたの改善点を色々と言になおすから、ちゃんと正座して聞きなさい」

「え、あの……」

「なに？ 兄貴の前だつたら嬉々として土下座もするの? 私の前だと正座も出来ないの? なにそれ不公平よ。良いからソシマツこと聞きなさい」

せつときまでのおどおどした弱氣モードはせりへやら、有無を言わせぬ口調ですが、あの梓ちゃん。それには論理的な整合性といづものが見当たらぬうえに

「うー、電車なのですが……」

いくら貸し切り状態で人がいないとはいっても、こんな場所で正座はちょっとじめんです。同情をひくため、せつときの梓ちゃんのよう泣目でうるうとした上目遣いを

「せ・い・ぎ」

「はー、隊長」

梓隊長の命令に、即座に従いました。人間、引き際の見極めが大事です。わたしは梓ちゃんの譲歩線を正確に見極め、ぎりぎり許されるだらうシートに正座しました。

梓ちゃんはちょっと不満そうでしたが、さすがに床を強要するほど暴虐ではありませんでした。きちんと靴を脱いでシートに正座をしたわたしに、ふんと鼻を鳴らすだけにとどめます。

しかし、ちょっとした問題があります。これは各駅ではなく特急

電車です。次の駅まで、あと十分ほどかかります。やわらかいシートに正座しているとはいって、これは

「さて、お説教よ、ゆみ。人としての常識を勉強しなおしましょう」  
たらりと冷や汗を流すわたしの心の内を知つてか知らずか、短く  
も長いお説教が始まりました

## その15 くそぐん

「は？」

田を覚ますと、わたしは駅に戻っていました。

「ええっと、ここは駅……？」

一瞬自分の立ち位置を見失つていましたが、間違いなく、ボランティアに行つた施設の最寄り駅です。

しかし梓ちゃんの恐怖のお説教のせいでしょうか。ここにくるまでの前後の記憶が抜け落ちています。正座でお説教されていたせいで、ちょっと意識が異次元に突入していたようです。それでもちゃんとこの駅に降りてるあたり、さすがですわたし。

「あー、でもまだちょっとしごれていますね」

顔をしかめながら、太ももをさすります。

いや、酷かつたんですよ、梓ちゃん。普通に正座させられるだけならばまだしも、最終的には膝の上に乗つかつてきました。正座をするわたしの膝に行儀よく座つて、超至近距離で目をじつと見つめて説教してくるんですよ。十分やそこらとはいえ、ストレス負荷のあまり後半は意識が遠くに飛んでいつたくらいかったです。

とはいって、やることがあるのですからいつまでも突つ立つてゐるわけにもいきません。

意識を集中させます。先輩の気配先輩の匂い先輩の気配、と愛を込めて念じながら、大体の場所の辺りをつけます。

「そんなに遠くないですね……」

先輩の気配が感じられるところは、児童福祉施設からそんなに離れた場所ではありませんでした。

こういう時、先輩の携帯に連絡を入れられないのが不便です。連絡しようと、わたしは毎日山のようにメールを送った結果、番号を着信拒否にされてしまいました。梓ちゃんに至っては、そもそも先輩の番号を自分の携帯に登録すらしていません。「兄貴の情報が入るなんて、考えただけで汚れる気がする」と言っていたのを覚えています。

足は……つん、だいぶ回復しました。何とか動きます。  
わたしは、先輩のいる場所に向かって歩きはじめました。

## その16 とつとつ

先輩は、公園にいました。

やつぱり女の子と一緒にでした。施設からは少し遠いところですし、職員の人もここまでまだ探しにこれていなかつたのでしょうか。

先輩は、公園のベンチで、うつらうつらしている女の子を、おふつっていました。

「…………」

「あー。完全にアウトです。先輩のことを知らないならともかく、うちの学校の人間が見たら即通報するレベルの光景です。職質されたりびつあるつもりなんでしょうが。

「あーでも先輩の歳なら兄妹に見えない」ともないですか……」「…………君か」

ぶつぶつ呟いていますと、さすがに先輩がこちらに気がつきました。女の子をおぶったまま立ち上がり、こちらに近づいてきます。

「どうしてここに？　梓はどうしたんだい？」

「施設の方から、その子がいないと電話があつたんで、もしかしたらと思つて折り返してきたんです。梓ちゃんはことのしだいによつては殺人衝動を抑える自信がないと言つて、先に帰りました。梓ちゃんのことですから、あとで心配になつて戻つてくるかもしれませんけど」

梓ちゃんは、ほんとに自分といつものをよく承知しています。先輩も納得したように頷きました。

「なるほど」

「それよつその子、やつその施設にいた子ですよな。先輩は何をやつているんですか？」

「この子をおぶつてるんだよ」

見てわかることを、説明しないで欲しいです。

「もう一回、同じことを聞いた方がいいですか？」

少しきづけのある口調になつたのは、許してもうましくない。

「この子は、帰りたくないところだよ」

「……」

なぜ、と聞くつとめて、少しためりひてしましました。

そんな躊躇に気付いた様子もなく、先輩はとつとつと話します。

「今日が思ひの他楽しかつたらしくて、紙芝居の続きが知りたくて、いつも施設を抜け出したりしてこんだよ

「……」

そんなに、楽しかつたのでしょうか。あんな紙芝居、適当にやつていただけです。

「……その子、虐待でもされたんですか？」

胸の中で、『ちやんちやん』した感情が雑多に入り混じります。いつもやんと自制するのですが、それを整理しきれなかつたせいで

しゃべ。普通には聞きたくない、真っ先に思いついた最悪の予想を言葉に出してしまいました。

「いいや」

先輩は首を振つて否定しました。

「そこまで深刻ではないよ。ただ、上手く溶け込めてないようだけみたいだね」

「……そうですか？」

その返答には、我ながら同情がこもっていました。  
いわれのない迫害ならともかく、それを努力不足だと断じてしま  
うわたしは、ひどい人間なのでしょうか。溶け込めない人間には、  
それだけの理由があるのです。

「先輩。その子、貸してください」「持てるのかい？」

がんばれば、三秒ぐらくなら平氣です。

もちろんそんなことは口に出さずに無言で両手を差し出すと、先  
輩が女の子を丁寧に渡してくれました。小さくとも、その重みはず  
っしりと腕にきます。

持ち続けられる氣がしなかつたので、受け取つてからすぐには地面  
に立たせました。

「……あのね」

「世話をみると甘やかすは、まつたくの別物ですよ」

なにか言おうとした先輩の口を、言葉で押し込めます。まさか甘

やかしてこるつもりはない、などとこう言い訳は、はながら聞くつもりはありません。

「この子はわたしに任せて、先輩は先に帰ってください。男の人が連れていくと施設の人になだ誤解されかねませんし、先輩はずっと甘やかしそうです」

さすがにそんなことはないでしょうが、先輩がロリコンだという前提条件を置けば説得力のある理由ではあります。

それでも先輩はちょっと未練があるようですが

「その子、どうするんだい？」

「施設の方が心配されているので、連れていきますよ」

当たり前のこと当たり前に言います。ただ引っ込み思案なだけの女の子を連れだす理由も引き留める根拠も、わたし達にはないです。

「そうだね」

それがわかつてゐるのか、先輩は案外大人しく踵を返しました。

「…………」

先輩が見えなくなつてから、わたしは頭をふらふらさせている女の子の頬を、ぺちぺちと叩きます。

「ほら、起きてください」

「あ……」

女の子が、ほんやつと皿を開けました。

「かみしばこの、おねいりやん」

「おねいりやんってなんですか」

もともと達者ではないけれどが、せうじ回っていません。ほっぺたむに一つてひつぱりてやつましうか。おもちみたこによく伸びることでじょうね。

「おはよう」「わこまく。歩けますか？ おねむなう、おしゃべりしないでもいいですよ」

相手するのが面倒なので、とこづ本音はもうひん隱します。  
女の子せりこじと黙れついで皿をひかりながら

「まだあ、あそぶうの」

「 もどりなきやだめですよ。友達がたくさんこるのでびしこ」と  
はないでしょ「う..」

「いないもん……」

「ああ……」

そういうえば、馴染めてないんでしたつけ。いまのは失言でした。

「だから、かえらなくていいもん……」

「もん、じゃないですよ」

よくわからない理屈に、ため息をつきます。

子供だから、そんな我がままを言つていいとは思います。けれども、聞き分けなければいけないこともあるんです。

それに、わたしはこの子の保護者でもないので、そんな我がまま

をかみ砕いてあげる気はありません。

「だつてえ、あそこ、さみしいの……」

「はいはい」

「みんな、はなしてくれないの……」

「そうですか」

「だから、きょう、たのしかったの……」

一瞬、ぴたりと呼吸が止まりました。

「そう、ですか」

「どうも、この子の脱走の一因に、わたしがあるようです。」

「……あのですね」

わたしは、女の子と手をつないで歩きはじめます。さすがに先輩みたいにおぶる気はないですが、手を引いてあげるぐらには、年長者の役目でしょう。

女の子は、よたよたした足取りながらも付いてきました。

「保護者の位置にいる人は、そりや優しいですよ。田下を構つてあげるのが、目上の人間の役目で、仕事ですから。今日のわたし達だつてそうです。そういう人たちは、『えるべき立場にいるんですか

ら』

「ふえ……？」

「でも同じ位置にいる人と仲良くなるには、話しかけなきゃ、ダメなんですよ。怖くても、面倒でも、自分から笑顔で話しかけないとだめだと思って行動するべきなんです。そうすれば、相手は意外なぐらいきちんと付き合ってくれます。人は、自分が思つてるほど他

人のことを覚えませんが、他人が思っているほど自分を忘れる」と  
も、またないんです」

「……？」

「人と付き合うのは面倒です。人生を過ごすのは、大概が苦しいです。大人になんかならず」に、いつでも守られた子供でいたいです。それは、大人になるにつれて思いを増します。それでも、わたしは自立しようと思いました。いまも、人に寄りかかりたくないと思っています。人と人は、対等であるべきだと思うのです。だって、わたしは」

別に、女の子に教えているわけではありません。ほとんど理解できていないでしょう。実際にさつきから、女の子の首はななめに傾きっぱなしです。

ただ、胸の内を吐きだしたいだけなのです。

「ちいさいのが、嫌だったのです」

だから、元気よく話して、活発に動いて、明るく振る舞つて、少しでも自分を大きくみせたかった、わたしは、そんな、コンプレックスを原動力にした、ちっぽけな女でしかないので。

「わたしはわたしが好きではありません。自分のことが嫌いでした。自分の意味なんて知りませんでした。だから、わたしは…………いえ」

こんなこと、子供相手にすることでは、なかつたですね。梓ちゃんに反論できません。これでは、当たり散らすのと変わりませんからね。

「…………めんなさい。もう、静かにしていてくださいね」

余計な事を、喋つてしまひますから。

「ふえ？」

とまどい女の子に、そつと笑いかけます。

「なんなら、紙芝居の続きを話してあげますかい」

自分で作ったものですし、何度も練習していたおかげで、内容はほとんど暗記しています。少なくとも、そらんじるぐらにはできます。

「ほんとう」

顔を輝かす女の子に、すまし顔で「もちろんです」と頷きます。

「ただ、絵はなしになりますけどね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6010z/>

ロリコン・コンプレックス！

2012年1月5日19時49分発行